506
251

10148

506
251

國民傳說

著イトスルト

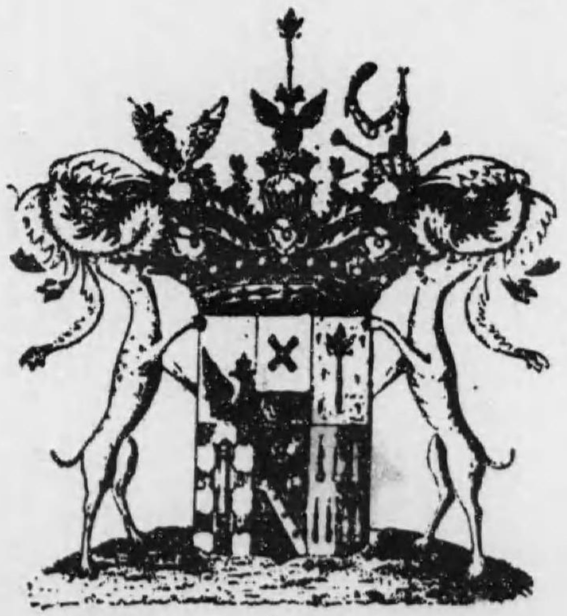
譯雄敏田飯

春秋社

1014 8 506-251

露國々民傳說

著イトスルト
飯田敏雄譯



ГЕРБЪ РОДА ГРАФОВЪ ТОЛСТЫХЪ,

春秋社

大正
11. 9. 21
内交

目次

國民傳說……一——九九
人はどれ丈けの土地を要するや……二
鷄の卵ほどの穀粒……二九
教子……三五
三人の隱者……六八
悔改むる罪人……八〇
空の太鼓の話……八五
虐げられた猶太人のために書かれし話……一〇一——一二六
アッシリア王エサルハッドン……一〇二
勞働と疾病と死と……一一四
三つの疑問……一一九

國民傳說

人はどれ丈けの土地を要するや

鶏の卵ほどの穀粒

教子

三人の隱者

悔改むる罪人

飯田敏雄譯

人はどれ丈けの土地を要するや

一

姉が妹を訪ねに町から來た。姉は或る商人に嫁いてゐたが、妹は農夫の所へ嫁いてゐた。二人の姉妹は茶を喫んで話をしてゐる中に、姉の方は自分の町での生活を大げさに自慢し出した――それは自分がどんな生活をしてゐるといふこと、暢氣に愉快に出て歩くこと、子供等には綺麗な服裝をさせ、美味い物を食べたり飲んだりしてゐること、そして氷滑りや散歩や芝居に行かうといふやうなことであつた。

妹はそれを聞いて腹立たしく思つた。そして其の報復に商人の妻の生活を貶して自分の田舍の生活を賞めそやした。

『私の方から云へば、私は姉さんの自分になつて見たいとは思はないよ。』と彼女は言つた。『成程私達の生活は何一つ珍らしい事もない生活で、私達はこれぞといふ心を惹く物は知らないでせう。けれ

ども貴女は立派な生活をしてゐても、ほんとに大きく商賣をやるか身代限りをしなければならんでせう。諺にもあるぢやないの『損は得の兄だ。』つて。成程貴姉は今日はお金があるかも知れないが、明日は街頭を彷徨くかも知れないよ。私達はこんな田舍にゐても、それよりはもつとましな生活をしてゐる。百姓の生活は細いかも知れないがそりや長いよ。つまり決して有福ぢやないけれど、何時も困るといふことはないわけさ。』

姉は彼女の言葉を直に取り上げた。

『「困ることはない」つて？』と彼女は問ひ返した。『「困ることはない」――あの樣の惡い豚や仔牛の外何も無くつてかね？綺麗な衣服一枚無し、友達も一人も無しで「困らない」つてかね？まあ驚ろいた。どんなに一生懸命でお前の旦那さんが働いても、お前さん達は一生泥土の中で暮さなけりやならんし、其處で死ぬんだらう――さうさ、お前の子供達だつて其の通りさ。』

『そんな事はありやしないよ。』と妹の方は答へた。『私達にはこれが通常なの。私達の生活は辛いけれど、少くも土地は自分の所有だし、他人に頭を下げたり言葉を低くして物を頼んだりしないでも濟むんだよ。けれども町にゐた貴姉達は――貴姉達は惡い事だらけの中に住んでゐる。今日は何もかもうまく行つてゐるが、明日は惡い眼が貴姉達を睨んでゐるかも知れない。そして貴姉の旦那さんは胃牌や酒や女に誘惑されて、貴姉も家の者の身もお了ひになつて了ふ。さうぢやない？』

妹の夫のバホームは暖爐の傍で二人の話を聞いてゐた。

『眞實だ。』と彼は言つた。『俺は子供の時分から生れた所の土を掘つて今日までやつて來た。だから下らない考が頭の中に浮んで來る餘裕がなかつた。だが俺には一つ情ないことがある――持つてゐる地所が餘り少ないことだ。唯土地さへくれりや、俺はどんな人間も恐れやしない――惡魔だつて恐れやしない。』

二人の女は茶を喫み終つて、少時の間衣服の事などを話し合つてゐた。それから食器を洗つて臥床に就いた。

其の間ずッと惡魔が暖爐の後ろに坐つてゐて、何もかも聽いてゐた。彼は農夫の妻が夫を高慢な心持ちに引込み、彼に、土地さへ與へられたら惡魔にでもそれを取らせないと誇らしげに言はせたのを聽いた時には少からず喜んだ。

『よし、よし』と惡魔は考へた。『お前と一つ勝負をして見よう。俺はお前に澤山土地をくれてやらう――それからもう一度取り戻してやるぞ。』

二

この農夫達の家の傍に百二十デシャチィナ（一デシャチィナは我が一町餘に當る）程の僅かな土地

を有つてゐる女主人がゐた。以前にはこの婦人は農夫達とも折合がよく、少しも權利を振り廻して威張るやうなことはなかつたが、今では或る退職の軍人を管理人に置いて、其男が罰金で農夫達を窘めに掛つた。どんなにバホームは氣を付けても、飼馬の一匹位婦人の畑の燕麥の中に踏み込むとか、牛が庭に迷ひ入るとか、仔牛共が牧場を荒すとかいふことはあつた。そして斯ういふことがあると何時でも罰金を取り立てられた。

バホームは罰金を出すと、家の者を打つたり叱り飛ばしたりした。夏の仕事の間に彼は管理人から酷い目に遇つた。そこで彼は家畜を復藥置場に置くのを此上ない好い事とした。彼は家蓄を其處へ置くと費用の嵩むことを思つたが、それでもその方が他の點で心配がないのであつた。

その冬、女主人は地所を賣るさうだ。そしてあの管理人がその土地もそれに附屬した大道の權利も買はうとしてゐるさうだといふ噂が外にまで擴がつた。此の噂が農夫達の耳に入つた。そして彼等は吃驚した。

『若しも』と彼等は考へた。『あの管理人が地所を買ふとすると、彼奴が奥さんの下にゐた時よりも未だ酷く罰金で我々を困しめるだらう。どうかして俺達であの土地を持つやうにしなけりや可かん。俺達は皆あの周圍に住んでゐるのだから。』

そこで村團から一人の代表者が女主人に會ひに行つた。そして地所を管理人に賣らないで、自分等

に先買權を與へてくれるやうに、さうすれば自分等の方で他に高い買手を見付けるからと賴んだ。婦人はこれを承諾した。そこで農夫達は其の地所全體を買占めるやうに村團に交渉を始めた。彼等はその事で相談を開いた。一度で濟まず二度まで開いたが、議案が通過しなかつた。實は例の惡魔が何時も彼等の意見が一致しないやうにして其の目的を打壞したのであつた。そこで農夫達は皆の者が別々に自分の力で買へる丈け地所を買ふことに相談を決めた。そしてこれにも女主人は承諾を與へたのであつた。パホームは或る日隣りの者が二十デシャチィナを買つたといふこと、女主人は其の代價の半分は一年後に拂つて貰つても好いと承諾したことを聞いた。パホームは羨しくなつた。『若しも』と彼は考へた。『他の者共が悉皆あの地所を買つて了つたら、俺は寒い所に一人殘されたやうな氣がするだらう。』そこで彼は妻に相談した。『みんな少しづゝ買つてゐるぜ。』と彼は言つた。『だから俺達も十デシャチィナ程買つた方が好いと思ふがね。今のやうぢや全く食つて行けないよ。管理人の奴罰金で俺達のものをみんな取上げやがるから。』そこで二人はどうして買つたものかと考へた。

彼等は百ルーブリは貯金してゐた。そこで仔馬一匹と蜜蜂を半分賣り、それに息子を仕事に出して漸く地代の半分丈けは集めることが出來た。

パホームは其金を悉皆集めた。そして十五デシャチィナと森林地を少し選んで、女主人の所へ話を決めに行つた。約定が出來て、パホームは手附金を拂つた。それから彼は町へ行つて讓渡の手續を濟

せた。(代金の半分は即時に拂つて、後半分は二年内に拂ふことになつた。)——さてこれで！パホームも地所持ちになつた。彼は亦義兄から少し金を借りて、それで種子を買つた。これを彼は新に買つた土地にちやんと蒔いた。そして作はよかつた。そこで一年の内に彼は女主人にも殘金を拂ひ義兄にも借金を返した。今では彼は立派な地所持ちになつた。彼が種子を蒔くのは自分の土地であつた。彼が刈るのは自分の乾草であつた。彼が伐るのは自分の薪木で、彼が草を食はせるのは自分の家畜であつた。彼は耕作に、或は作物や牧場の具合を見に、他人のものでない其の土地へ出て行く度毎に、何とも云へぬ嬉しさを覺えた。その草は自分には何だか他の草と異つてゐるやうに見え、花の咲き方も異ふやうに思はれた。以前、彼が馬に乘つて此の土地へ來た時には、それは正しく——土地であつた。が、今ではそれは矢張り土地であり乍ら、異つた土地であつた。

三

斯うしてパホームは暫くの間暮してゐた。そして幸福であつた。實際、唯他の農夫達がパホームの作物や牧場を其儘荒さずに置いてくれたら、何も不平と言ふことはなかつたゞらう。彼は幾度か抗議を申込んだが、利目がなかつた。牛追ひの子供が彼の牧場に牛の群を引込んだり、馬が作物の中に夜どんなにかして入つて來たりすることは常々であつた。幾度となくパホームはそれ等を逐出してそれ

を見逃して置いたが、終には我慢し切れなくなつて、裁判所に訴へて出た。彼は農夫達が土地の不足な爲めにさういふことをするので惡意からするのではないことを知つてゐた。併し彼等は土地を喰ひ込んで來たのであるから、許しては置けなかつた。彼は彼等に道理を敎へてやらなければならなかつた。

ここで彼は第一の者を法廷に訴へて道理を敎へた。その次の者にも作らした。一人の者には罰金を科し、その次の者にも作らした。これが彼に對する反感を惹した。そして近所の者達は此度は態と彼の作物を盗み始めた。或る男は夜小林に入つて十本許りの菩提樹の皮を剝ぎ取つた。バホームは其後から此處へ來てこの有樣を見ると顏を蒼くした。彼は尙傍へ寄つた。すると樹皮は剝ぎ取られて其邊に撒き散らされ、幹は根こぎにされてゐた。僅かに一本丈けが枝を悉皆伐られて惡者の手から免れてゐた。が他のは其男が惡戯から綺麗に伐り倒して了つてゐた。バホームは急に腹が立つて來た。『畜生め。』と彼は考へた。『誰奴がこんな事をしたのか分つたら、唯ぢや置かねえぞ！』彼は一體誰奴だらうと益々怪しんだ。どうしてもセムカの野郎に違ひない。さう思つたので彼はセムカの所へ行つた。が、失敬な言葉の他には何一つ得る所はなかつた。それでも彼は却てそれをしたのはセムカだと確信して了つた。彼はセムカに苦情を持出した。そして二人共法廷に立つやうな事になつた。裁判官は幾度か審理した。それから證據不充分といふので其の事件を却下した。これが爲めバホームは益々激昂した。

彼は村の巡査や裁判官まで罵つた。『貴樣等裁判官までが盗賊とぐるになつてゐやがる。』と彼は言つた。『貴樣等が正直な人間ならセムカの野郎を放免しやしまい。』實際バホームが裁判官も近所の者をも嫌んでゐることは確かであつた。彼は自分の土地で益々孤立して生活するやうになり、村園とも益々關係が薄くなつて行つた。

此頃其邊の農夫の中で他所へ移つて行かうとしてゐる者があるといふ噂が立つた。これを聞くとバホームは獨り考へた。『併し俺には此土地を離れなけりやならぬ理由はない。他の奴等が行くとすりや、それで俺の土地がもつと廣くなるといふもんだ。俺は彼奴等の土地を悉皆買つて、此邊は皆俺の所有にすることが出來る。さうなりや俺はもつと面白く暮せるだらう。今のやうぢや餘り窮窟だ。』

その後間もなくの事であつたが、或日バホームが家に坐つてゐると、一人の農夫風の旅人が入つて來た。バホームは其男を一晩泊らせて食事もさせた。それから話の序でに、彼が何處から來たのかと訊ねた。農夫はそれに答へて、河をずつと下つた方——ヴォルガ河の彼岸の或所から來たので、其處で仕事をしてゐたのだと言つた。それから續いて彼は其處には今移住者の一部落が出來かゝつてゐることを話した。彼は、斯う〳〵いふ土地で、斯んなライ麥が出來るといふやうな事も話した。そりや、そのライ麥の莖と云つたら馬の隱れられる位の高さがあつて、五掴みで一束になる位の太さ

がある！尙彼は續けて言ふには、其處に着いた時には、貧乏で仕事をする二本の手しか無かつた或る百姓などは今では五十デシャチィナからの小麥を作つてゐる。實際此一年の間に其男は小麥だけで五千ルーブリから所得たといふのであつた。

バホームの心は此話を聞くと燃え立つた。そして彼は獨り考へた。『何だつて俺はこんな所に貧乏して窮窟な思をしてゐなけりやならんことがあらう、そんな立派な生活が出來るといふのに。俺は此處を賣つて了はう――地所も家も――そして其金で其處へ行つて自分で新に家を建て、畑を作らう。こんた窮窟な所にゐるなあ、一生の損だ。兎に角俺は一つ其處へ行つて見て來よう。』

そこで夏になると彼は支度をして出掛けた。彼は汽船でヴォルガ河を下つてサマラまで行つた。其處から四百ヴェルスタを歩いて行つてとうく〳〵其場所へ來た。それは話に聞いた通りであつた。農夫達は各自に十デシャチィナの土地を貰つてすばらしい生活をしてゐた。そして彼は確かに皆から歡迎されることを知つた。のみならず、誰でも金を持つて其處へ來た者は割當の外の土地を無期限に欲しい丈け買ふことが出來るのだと彼は話された。一デシャチィナ三ルーブリで一番良い土地を、どれ丈けでも買へるといふのであつた。

バホームは斯んな事を殘らず聞いて、それから秋になつて家に歸つた。彼は直に賣りに掛つた。そして土地も家も家畜もうまく賣れて儲けた。そこで彼は自分の名も村の籍を除いて春の來るのを待つ

た。それから一家を提げて新しい所へと立つて行つた。

四

彼等は豫定通りに目的地に着いた。そしてバホームは直にその大きな移住地の住民として籍を入れられた。勿論村長達に酒を振舞つたり、必要な書類を入れたりしてからであつた。それから村の者達は彼れを連れて行つて、五十デシャチィナの土地――家族一人に十デシャチィナづゝをそれ〴〵異つた場所を見定めて與へてくれた、其他の共同の牧場もくれた。バホームは自分で家を建て、家畜なども飼つた。彼の割當られた土地丈けでも舊の土地の二倍はあつた。それは亦穀物も出來る位の土地であつた。此處に來て生活は今までの所より十倍もよくなつた。それは耕作地も牧草地も好きな儘に得られたからであつた。殊に牧草地は自分で飼ひたいと思ふ丈けの家畜が飼へる位充分にあつたからであつた。

初めの中、家を建てたり家畜を放つたりしてゐる間は、彼にはすべての事が此上なく良く思はれた。が、それから暫く居付いて見ると、復何だか窮屈な心持ちがした。彼は他の人のやうに白い土耳其小麥を作りたいと思つた。併し彼の當てがはれた五ケ所の土地には小麥の出來さうな地面は殆ど無かつた。小麥は草地で新しい土地か休閑地に作らなければならない。そして斯ういふ土地は一年作つたら、

後二年は草が復生えるやうに休ませて置かなければならない。實際、彼は自分の欲しいと思ふ丈けの軟かい土地を得た。がそれはライ麥しか出來ない土地であつた。小麥には硬い土地が必要である。そして硬い土地は望み手が澤山あつて、一同には行き渡らなかつた。のみならず斯ういふ土地の事では屢々紛爭が起つた。裕福な農夫は自分の土地に種子を蒔くが、もつと貧しい者は抵當を入れて商人に土地を借りなければならなかつた。最初の年はバホームはその當てがはれた土地に小麥を蒔いて、非常な收穫を得た。それから、もう一度小麥を蒔かうと思つた。が、其の土地は新しい所に播種をして去年の土地を休閑地として置く程には大きくなかつた。彼はもう少し土地を持たなければならなかつた。そこで彼は或る商人の所へ行つて、小麥の作地を一年の約束で借りることにした。彼は出來る丈けの播種をした、そして立派な收穫を得た。が、都合の惡いことには、其の土地は此の移住民から隨分隔たつて――實を云へば、作物を持つて來るのに十五ヴェルスタも歩かねばならなかつた。そこでバホームは農業兼營の商人等が立派な家に住み、其の土地のある邊で段々富裕になつて行くのを見ると、獨り考へた。『若し一層永い間土地を借りて、彼等のやうに其處に家を造つたらどんなものだらう。そしたら土地の方はうまく行くだらう。』そこで彼はそれを實行することに掛つた。

斯うしてバホームは絶えず土地を借りては其處に小麥を蒔いて五年を生活した。どの年も當つて、小麥はよく出來、金は入つて來た。併し斯うして何時までも生活することは寧ろもどかしいことであつ

た。バホームは毎年他所の土地を借りて家畜を其處まで連れて行くのは嫌になつた。特別に好い土地でもあると、その度毎に他の農夫達が我れ勝ちに其處へ飛んで行つて、彼が全體それを借りて播種をしようと思つてゐる中に、彼等の間でそれを分けて了ふのであつた。或る時彼は一人の商人と仲間で或る農夫達の持つてゐる牧場を借りた。そして彼はそれを悉皆耕して了つた。ところが其の農夫達は裁判で負けて其の土地を失くした。そこで彼の折角の勞力も無駄になつて了つた。若しそれが立派に彼自身の土地であつたなら、彼はどんな人にも負けることはなく、面倒な事も起りはしなかつたのだらう。

そこで彼は何處か自由な、係りのない土地を買へないものかと考へ出した。一生懸命探してゐる中に、彼は或る農夫を探し當てた、此男は破産をして了つたので五百デシャチィナの土地を廉く彼に賣つても好いと云ふ事であつた。バホームは此男と掛合をした。そして種々相談を重ねた結果、千ルーブリで賣ることになり、地代の半分は即金で殘りの半分は後でも好いといふことになつた。二人が此相談を取纏めてから後のことであつたが、或る日、一人の商人が乘つて來た馬を返すためにバホームの家に立寄つた。彼等は茶を一杯飲んで世間話をした。商人は自分は遠い〳〵所――バシュキル地方から來たのだと言つた。實は、其處で、(彼の言ふのには。)自分は五千デシャチィナの土地を僅か千ルーブリで買つたといふのであつた。バホームは尙先を彼に訊ねた。商人はこれに答へて、『私のした事

は、』と言つた。『其處の老年者達に彼等の喜びさうなもの（長衣とか敷物とか茶を一箱とか。）を遣り、尙百ルーブリ程を加へ、それから飲みさうな者にはウォーツカを遣るといふ風にしたんです。その結果私は一デシャチィナについて二十コペイカで土地を買つたといふわけです。』斯う言つて彼はバホームに其證書を見せてやつた。『其の土地は、』と彼は最後に言つた。『河に向つてゐましてね、一帶に廣々した、草のある平野ですよ。』バホームは尙其の先を訊ねた。

『その土地は、』と商人は尙續けて言つた。『一年掛つても廻り切れますまい。バシュキル地方は一體にさうですがね。加之、人間が羊のやうに鈍物ですからね、何でも全く唯で買ふやうなものですよ。』

『ふむ。』とバホームは考へた。『俺は僅か五百デシャチィナに千ルーブリ出し、それに借金まで背負ひ込んでゐるとは何といふことだ。其處へ行けば同じ金で眞實に立派な大地主になれるといふのに。』

五

バホームは其の商人にどうしてバシュキル地方に行けるかを訊ねた。そして此男が立つて行くが早いか、自分が其處へ出掛ける準備をした。妻は家に殘し、唯作男一人丈けを連れて先づ町へ向つて出掛けた。町へ着いた彼は商人に言はれた通り茶の箱やウォーツカや其他の贈物を買つた。それから二人の者は其處からずん〳〵進んで行つて、遂に五百ヴェルスタも來た。そして七日目にバシュキル人の小

舍のある所へ着いた。何もかも商人が言つた通りであつた。其邊の人々は母衣を掛けた車の中に生活してゐた。その車は廣々とした平野を流れてゐる川の岸を曳いて行かれるのであつた。彼等は地を耕しもせず、穀物も食べなかつた。けれども平野には牛やカザック馬が群をなして歩いてゐた。車の後ろには仔馬が繫がれてゐて、母馬が一日に二度乳を哺る爲めに其處へ連れて來られた。人々の常用にしてゐる食料は牝馬の乳で、女達はそれからクムイスといふ飲料を造る。それからそのクムイスを攪拌して乾酪を作るのであつた。實際バシュキル人の知つてゐる飲料といふものはクムイスか茶かであつた。それから彼等の唯一の固形食料は羊肉で、唯一の娛樂は笛を吹くことであつた。これでも彼等は皆柔和で快活さうに見えた。そして年中お祭り氣分でゐた。情ないことに彼等には敎育が缺けてゐて、露西亞語は全く知らないが、それに拘らず親切で愛想の好い人間達であつた。

彼等はバホームの姿を見るや否や車から出て、此の客を取卷いた。通辯が出て來た。そこでバホームは自分は土地を買ひに來たのだといふことを彼に話した。それを聞くと人々は喜んだ。そしてバホームを夢中で抱いて、一番良い車に連れて行つた。彼等はその車の中の、上に柔かい布團を敷いた蔬の上に彼を坐らせた。そして茶やクムイスの用意をさせ始めた。羊を屠殺してその肉が馳走に出された。それが濟むとバホームはタランタス（二輪馬車）から贈物を持出して彼等に分けてやつた。そして茶も分けてやつた。するとバシュキル人は暫くの間互に何か喋舌つてゐたが、終に通辯に斯う話させ

た。『斯ういふことです。』と通辯は言つた。『皆貴方を非常に好いて居ります。そして私共が種々贈物を戴いたその御禮に出來る丈けお客さんの御望みを叶へさせて上げたいといふのが私共の習慣になつて居ります。そこで貴方は私共に贈物を下されたのですから、何でも私共の持つてゐるものゝ中で貴方のお望みのものを仰有つて下さい。さうすれば貴方に差上げるやうに致します。』

『私が何より欲しいと思ふものは、』とバホームは答へた。『貴方々々の土地の幾分です。私のゐる所では、』と尙言葉を續けた。『充分土地がありません。そしてそれも悉皆耕されて了つてゐるのです。ところが貴方々々の所には土地が澤山、然も私がこれ迄見たこともないやうな土地が澤山あります。』

通辯はそれを飜譯して話した。するとバシュキル人は復互同志で相談した。バホームには彼等が何と言つてゐるのか解らなかつたけれども、面白さうに大聲で何か言つてゐること、それから一度にドッと笑つたことが分つた。遂に彼等は話を止めて、バホームを見た。すると通辯は話し出した。

『斯ういふことです。』と彼は云つた。『貴方の親切の御禮に、幾らでも貴方のお望みな丈け土地を賣つて上げることに致します。どうか手眞似でどれ程御入用かを仰有つて下さい。それ丈け差上げることに致しませう。』

併し、此時になつて人々は復互に相談し出した。そして何かで口論を始めた。バホームはどういふことかと訊ねると、通辯は答へた。『中に土地の事ならば先づ酋長に訊ねて見なければならん。酋長

がゐなくては何も決められぬと言ふ者と、そんな必要はないと言ふ者とが出來たのです。』

六

バシュキル人等が口論をしてゐる時、突然其の車の中へ狐の皮の帽子を被つた男が入つて來た。それと見ると一同立ち上つた。通辯はバホームに、『此人が酋長です。』と言つた。そこで直にバホームは一番上等の長衣を取出して其新しく入つて來た人に差出した。と同時に五ポンドの茶も送つた。酋長はそれを當り前に受取つて、それから上座に坐つた。バシュキル人達は何やかや彼に說明し出した。酋長は長はぢつと氣を付けて聞いてゐた。が、ニコッと笑つてバホームに露西亞語で話し掛けた。

『よろしい。』と彼は言つた。『どうか貴方の氣に入つた所を何處でもお選びなさい。土地はいくらもあるのだから。』

『それでは俺の欲しい丈け取れば好いんだ。』とバホームは獨り考へた。『だが、何とかして其約定を緊かりさせなければ可かん。彼等は『其土地は貴方に上げます。』と言つても、復取返して了ふかも知れぬ。』

『御親切に有難うございます。』と彼は大きい聲で言つた。『お言葉のやうに、貴方は澤山土地を持つておゐでゞす。それで私は少し戴きたい。唯どれ丈け私に下さるか正しく知りたいのです。何かの方

法でそれを測量して、正しく私に讓渡して戴ければ有難いのです。生死は分らぬものです。たとひ貴方々は皆良い方で今それを私に下さつても、貴方々の御子達が復それを取戻すやうな事がないとも限りませんから。』

酋長は微笑した。

『讓渡は、』と彼は言つた。『もう決定しました。此の會議が我々の認定の形式なのです――これ程確かなものはありますまい。』

『ですが、』とバホームは言つた。『或商人が近頃此方へ來て、其男に貴方々は土地を賣り、正式な讓渡の證書をお渡しになつたといふ事を私は聞きましたが。さういふことであればどうか私にも同樣に願いたうございます。』

酋長にはわけが解つた。

『よろしい。』と彼は答へた。『此處に書記が居ります。町へ行つて必要な手續はしませう。』

『併し地代は如何程ですか。』とバホームは訊ねた。

『地代は、』と酋長は答へた。『一日に僅千ルーブリです。』

バホームには此の日割といふことが全く解らなかつた。

『それは幾デシャチィナのことですか?』と彼は直に訊ねた。

『私共はさういふ風には勘定はしません。』と酋長は言つた。『私達は唯日割で賣るのです。つまり貴方が一日の中に歩き廻れる丈けの土地、それ丈けが貴方のものになるのです。それが我々の方の計算で、其の一日に歩いた分の代價が千ルーブリなのです。』

バホームはギョッとする程驚いた。

『なに、人は一日に隨分歩けるものです。』と彼は言つた。

酋長は復笑つた。

『えゝ、兎に角、』と彼は言つた。『それは貴方のものになります。唯一つ條件があります――それは若し其の日の中に貴方が出立した所に復戻つて來なければ、貴方の金は沒收されて了ふのです。』

『ですが其の廻つた場所を貴方の方ではどうして解るやうにします?』

『私共は、』と酋長は答へた。『何處でも貴方の選んだ所に立つて居りませう。貴方が出立されて廻つて來る間、私と部下の者とが其處に居ります。貴方の後から若い者を馬に乘せて遣ります。貴方は御自分の打たせたいと思ふ所に其者に杭を打たせなさい。その後で其の杭を辿つて犁を入れさせます。貴方の欲しいと思ふ丈けの場所をお取りなさい。唯日暮までに貴方が初め出立した所に戻つて來なければ可けません。あなたが廻るだけの土地、それ丈けの土地が貴方のものになるのです。』

そこでバホームは其の條件を承諾した。そして翌朝早く出立することに約束を定めた。それから一

同の者は再び話を始め、更にクムィニを飲み、羊肉を食べ、それから茶に移つて、祝宴は日暮方まで續いた。遂にパホームは毛布の寢床に案内され、バシュキル人は各自家へ歸つた。翌朝未明に河の彼岸に集まつて定められた地點に出掛けて行くといふ約束であつた。

七

パホームは毛布の寢床に横になつた。併し自分でも『俺は此處に畑を作るんだ。』と言つた其の土地の事を考へて一睡も出來なかつた。

『俺は明日素敵に大きな「約束の土地」を取つて來てやらうと思ふからだ。』と尙ほ彼は續けて言つた。『俺は少くも一日に五十ヴェルスタは歩ける。五十ヴェルスタと云へば一萬デシャチィナ位はある。さうすれば俺は誰にも頭を下げないでもよくなる。そして二頭牛の犁を使つて作男も二人は置けるだらう。俺は一番良い土地を耕して、殘りの土地で家畜を飼はう。』

其晩はパホームはまんじりともしなかつた。が、曉方近くになつてほんの一寸の間とろ〳〵つとした。と思ふと彼は夢を見た。彼は其日入つたのと同じ車の中に寢てゐて、外で誰だが笑つて話してゐるのを聞いてゐるやうに思はれた。あんなに笑つてゐるのは誰だらうと思つて彼は車の外に出て行つた。すると先の酋長が地面に腰を下して、餘りの可笑しさに轉げ乍ら脇腹を壓へてゐるのであつた。

それから、矢張り夢の中で、彼は酋長の所に行つて何がそんなに可笑しいのかと訊ねた——すると間もなく酋長と思つたのは誤りで、それは近頃土地の事を話しに彼の所へ來たあの商人であつた。そこで復、彼は『つい此の間お前さんには私の家で會つたね。』と自分で言つたと思ふと、其の商人は忽ち、前に彼が故郷にゐる時分に訪ねて來たヴォルガ河からやつて來た農夫に變つて了つた。終にはパホームはこの農夫といふのも實は農夫ではなくて、角や蹄のある惡鬼其物であることを知つた。そして其惡魔が其處に坐つて大聲で笑ひ乍ら何かじつと見てゐるのが分つた。そこでパホームは、『彼奴は何を見てゐるのだらう？』と獨り考へた。そして夢の中で彼は少し側へ寄つて見た。すると一人の男——裸足で襯衣とズボンだけ着けてゐる——が顏は敷布のやうに眞白になつて仰向けに倒れてゐるのが見えた。そこで尙よく氣を付けて其男を見ると、パホームには其男といふのが自分であることが分つた！

彼は怖ろしさに喘いで眼を覺ました。眼を覺すと其處が眞實であつたやうな氣がした。それから彼はもう明るくなりはせぬかと思つて四邊を見た。夜が明けかゝつてゐた。

『さあ出掛ける時間だ。』と彼は思つた。『あの好い人間達を起してやらなけりやならん。』

八

バホームは起きて、二輪馬車の中に寢てゐた自分の作男を起し、そしてもう廣野に出て測量をする時間だから馬の用意をする樣に、それからバシュキル人を起して廻るやうに彼に吩咐けた。そこでバシュキル人も起きて用意をした。酋長もやつて來た。彼等は朝食にクムイスを飲み、バホームには茶を出さうと言つたが、彼は待つてゐられなかつた。『もし出掛けるものならもう出掛けませう。』と彼は言つた。『丁度時間ですぜ。』そこでバシュキル人は馬に馬具を附けて出掛けた。或者は馬に乘り、或者は又馬車に乘つた。バホームは彼の作男を連れて二輪馬車で行つた。彼等は丁度夜の明ける時に廣野に出て來た。そしてバシュキルの語でシハンと呼ぶ小さな丘の方へ進んで行つた。其處で馬車に乘つてゐる者達は下りて皆一緒に集まつた。酋長はバホームの傍へ來て手で一體の土地を指した。『此處から見える所は何處もみな私達の土地です。』と彼は言つた。『どちらの方でもお好みの方をお選び下さい。』バホームの眼は燃えるやうに輝いた。それは見渡す限りの土地は草が青々と繁つて、掌のやうに平かに、草の下の方は芥子殼のやうに黑くなつてゐるのを見たからであつた。唯峽間になつてゐる所丈け草が無かつた。草は人の胸の高さ程もあつた。酋長は狐の皮の帽子を脫いで、それを丘の丁度眞中の所に置いた。『此處が、』と彼は言つた。『出立點ですよ。貴方のお金をこの中にお入れなさい。貴方が出て行つてゐる間此の僕の人に傍にゐて貰ひます。此の標から貴方は出て行つて此の標の所に戻つて來るのです。貴方の廻つて來る丈けの土地はみな貴方のものになるのです。』

バホームは錢を取出して、それをその帽子の中に入れた。それから上衣を脫いでチョッキ丈けになり、服の周圍には帶を緊く卷き付け、胸に麵麭を入れた袋を押し込み、水罐を肩紐に結び付け、長い長靴を穿いて、それから出立の準備に掛つた。彼は絕えずどちらの方向に向つたら一番好いかと獨り胸に思案した。何故かといふに何處を向いても良い土地ばかりだからであつた。『あゝ、好いわ、何處も同じのやうだから、俺は日の出の方へ向つて行かう。』と彼は遂に決斷した。そこで彼は其方へ顏を向けて、日が昇るのを待つてゐる間絕えず足を試してゐた。『一時でも無駄にしちやならん。』と彼は考へた。『まだ涼しい中に出來る丈け歩くのだから。』

それから乘馬のバシュキル人も丘を登つて來た。そしてバホームの後ろに立並んだ。太陽が地平線上に現はれるが早いか、バホームは愈々進み出て廣野へ踏み出した。乘馬の連中は彼の後をついて行つた。

彼は格別遲くも速くもなく歩いた。一ヴェルスタ程行つてから、彼は立止つて、杭を立てさせた。それから復歩き出した。彼は初めの用心深い歩き方を何時か止めて、大股に歩き出した。直に復立止つてもう一本材を打たせた。彼は空の日を見上げた——日は丘の上を、其上に立つてゐる人々をも一緒に明るく照してゐた——そして五ヴェルスタ程は歩いたと思つた。その中に暖かくなつて來た。そこで彼はチョッキを脫いで、復帶を緊く締め直した。それから、進んで、更に五ヴェルスタ行つて立止つた。

その時は全く暑くなつて來た。彼は復日を見上げた。そして朝食時分だといふことが分つた。『一きり濟した！』と彼は思つた。『だがまだ四つある、供し方向を變へるにはまだ早過ぎる。』それは然うと長靴丈けは脱がなけりあ可かん。』そこで彼は坐つて靴を脱いで、それから復出掛けた。歩行が樂になつた。』もう五ヴェルスタ行つたらう。』と彼は考へた。『左の方へ曲りかけよう。彼の邊は馬鹿によささうだ。どうも行けば行く程地面がよくなる。』さう思つて彼は尙眞直に進んだ。併し振り返つて見ると、丘は殆ど見えなくなつて、其上に立つてゐる人々は小さな黑蠟のやうに見えた。

『さあ。』と遂に彼は獨語を言つた。『俺は可成り來たが、これから曲らなけりやならん。』彼はひどく汗をかいて、喉が渴いて來た。そこで水罐を持ち上げて一杯飲んだ。それから彼は其の地點に杭を打たせて、其處から急に左の方に曲つた。彼は高い草、燒けるやうな日の中を進みに進んで行つた。彼は疲れ出した。そして日を仰いで見ると、晝食時だといふことが分つた。『さあ。』と彼は獨り考へた。『一休みしようか。』そこで彼は立止つて麵麭を少し食べた。併し腰は下さなかつた。それは『若し一度腰を下したら俺は自然横になるだらう。そして眠つて了ふだらう。』と獨り考へたからであつた。それ故彼は少時休んで、もう休めたと思ふと再び歩き續けた。初の中は彼には歩くことは何でもなかつた。それは食事のお蔭で元氣が恢復されたからであつたが、間もなく夕方近くなつて日が横に射して來るに連れて益々暑くなるやうに思はれた。バホームはもう疲れ切つて了つた。が、自分では唯斯う

思つた。『一時間の苦しみが百年の得になるのだ。』

彼は此の圓形の土地を既に十ヴェルスタも歩いて來た。そして更に左の方に曲らうと思ふと、忽ち水のない峽間の周圍に非常に好い土地が目に付いた。それはそのまゝ捨てゝ置くのは殘念だつた。『彼處なら麻が屹度よく出來るぞ！』と彼は思つた。そこで彼は尙ほ眞直に進んで行つて、遂に其の峽間も手に入れた。そして其處に材を立てさせて、再び方向を轉じた。丘の方を見ると、其處にゐる人々は殆ど分らない位であつた。十五ヴェルスタは大丈夫隔つてゐた。『よし。』と彼は考へた。『俺は二邊丈け長く取つた。後の一邊は出來る丈け短く取らなけりやならんぞ。』そこで彼は此の一邊に向つて出掛けた。そして歩調を早めた。復も彼は日を見た。もう夕食時に近くなつてゐた。そして彼は曲つてから僅か二ヴェルスタ來た丈けであつた。出立點はまだ十三ヴェルスタも先であつた。『眞直に大急ぎで行かなければ駄目だ。』と彼は獨語を言つた。『どんなに道が惡からうが。もう途上で餘計な場所などは少しでも取つてはゐられない。これ丈けでもう充分だ。』斯う思つてバホームは丘へ向つて眞直に進んだ。

九

彼は其方向に一生懸命進んだ。が、今では歩くことが非常に困しくなつた。彼の足はひどく痛んだ。

それは餘り擦つて血さへ出てゐたからであつた。そして絶えずよろ〳〵躓き出した。ごうかして少時休みたかつた。併し日沒前に丘まで戻るのであつたから、そんな事をしてはならないといふ事を知つた。少くも日の方で待たないであらう。否、日は絶えず彼に鞭打つてゐる馭者の樣であつた。幾度か彼は躓いた。『確かに俺は間違つた勘定はしなかつたかしら?』と彼は獨り考へた。『確かにいくら急いでも歸り付けない程澤山の土地を取つたのではないかしら?まだ行き着くまでには大分道程がある。俺は悉皆弱つて了つた。俺の錢も勞力も無駄になつて了ふやうな事はないものかしら?あゝ、よし、出來る丈けやつて見なけりやならん。』

バホームは元氣を付け直して、駈け出した。彼は血がだら〳〵流れる程に足を傷つけた。それでも尙ぐん〳〵走りに走つた。先へ先へと走つた。チョツキも上衣も長靴も水罐も帽子も——彼は皆放棄つて了つた。『あゝ!』と彼は思つた。『俺は見たものに餘り惚れ過ぎた。もう何もかも駄目だ。俺は日沒前までにはとてもあの標の所までは行き着けない。』彼の恐怖は只彼の呼吸を益々喘ませた丈けであつた。然も彼は尙走り續けた。彼の襯衣やズボンは汗みづくになつて手足にへばり付き、彼の口は渴いた。彼の胸の中は鍛治屋の鞴が火を吹いてゐるやうに喘ぎ、心臟は汽鎚の動くやうに激しく打つた。そして足は折れて行きさうで、最早自分のものでないやうに思はれた。彼は今ではもう土地の事などは全く考へなかつた。唯彼の思ふことは激勞のために死なぬやうにといふことであつた。それでも、

死ぬことはその樣に怖れても、彼は止ることは出來なかつた。『あれ程遠くまで行つて、それから止るとすると!』と彼は考へた。『さうだ。彼奴等は俺を馬鹿だと思ふだらう!』此時彼にはバシュキル人が躍り立つて彼に大聲あげて叫んでゐるのが聞えた。そしてその叫び聲が彼に新な元氣を更に起させた。彼は殘つてゐる限りの力を出して走りに走つた。太陽は今將に地平線に沈まうとしてゐた。あゝ、併し彼はもう出立點に近づいてゐた。彼には丘の上の人々が彼の方に手を振つて彼を勵まして居るのが見えた。地面の上に置いてある狐の皮の帽子、その中にある自分の金も見えた。酋長がその傍に手を脇腹に當てゝ坐つてゐるのも見えた。俄にバホームは今朝見た夢を思出した。『だが若し神樣さへ私を生かして置いてあの土地に住ませて下さるなら。』と彼は考へた。『私はあれ丈けの土地が持てるんだ。併し俺は何だか自分で身を殺したやうな氣がする。』それでも尙ほ彼は走り續けた。これが最後で彼は太陽を見た。それは大きく赤く、大地に觸れて、今や地平線の下に沈むところであつた。バホームは丁度日が沈んだ其時に丘に着いた。『あゝ!』と彼は失望の果叫んだ。何もかももう駄目だと思つたからであつた。併し、ふと彼は自分は下にゐるために、自分の上の丘の上にゐる人々によく見えるやうには自分には見えないのだ。彼等には未だ太陽は沈んだやうに見えないだらうと思ひ付いた。彼は坂を目がけて駈けつけた。そして坂を攀ぢ登るとき帽子がまだ其處にあるのが見えた。すると彼は躓いて倒れた——併し倒れ掛り乍らも手を帽子の方へ差し伸べた——そしてそれに觸れた!

『あゝ、出來した。』と酋長は叫んだ。『貴方は實際大變な土地を儲けましたぞ！』

バホームの下男は主人の所へ駈け付けて、彼を起さうとした。併し彼の口からは血がたく〳〵と出てゐた。バホームは其處で死んで了つた。下男は驚いて叫んだ。併し酋長は腰を下したまゝで、笑つて脇腹に手を當てゝゐた。

遂に彼は立ち上つて地面から鋤を取つた。そしてそれを下男へ投げてやつた。

『埋めてやれ。』と彼は言つただけであつた。

バシュキル人は皆立ち上つて行つて了つた。下男だけが後に殘つた。彼は頭から足まで主人と等身の墓穴――三アルミン程の――を掘つて、彼を埋めた。

鷄の卵ほどの穀粒

或時子供等が峽間で鷄の卵のやうな或る小さな丸いものを見付けた。併しそれには亦眞中に細い溝が付いてゐたので、穀物の粒のやうでもあつた。偶々通り過つた人が子供等の持つてゐたその物を見て、一ピヤトリ(五ペイカ)の銅貨を與へてそれを買取つて行つた。それから其人はそれを町へ持つて行つて、珍らしい物としてそれを皇帝に賣つた。

皇帝は賢人達を呼びにやつた。そして其の丸いものをよく調べて、それが卵か穀粒かを言ふやうにと命令した。賢人達はいろ〳〵に思案したが、其問題を解くことは出來なかつた。

そこで其小さな丸いものは窓敷居に置かれたまゝになつて居たが、牝鷄が一羽飛んで來て、其小さな丸い物を突つき、それに孔をあけた。そこでそれは穀粒であるといふことが皆の者に分つた。賢人達は急いで戻つて行つて、皇帝に其の小さな丸い物はどうしてもライ麥の粒に違ないことを話した。

皇帝は驚いて、賢人達に何處に又何時斯んな穀粒が出來たかを確かめるやうに命じた。そこで賢人達はいろ〳〵に思案して、書物を探したりしたが、何の發見も出來なかつた。そこで彼等は皇帝のと

ころへ戻つて行つて言つた。『私共には此の二つの問題はどうしても解くことは出來ません。私共の書物にはその事に就いては何も書いてございませんので。併し陛下には百姓共の中にお訊ねになりましたら如何でございませう。或は斯ういふ穀粒が何處に何時蒔かれたといふことを老人共からでも聞いた者がないとも限りませぬによつて。』

そこで皇帝は人を遣つて、農夫共の中で一番の古老を連れて來いといふ命令を下した。丁度斯ういふ老人が探し出されたので、皇帝の面前に連れて出た。其老人はもう顏は蒼黑くなつて齒も全くなかつた。そして撞木杖に縋つて漸く歩く位であつた。

皇帝は彼に其穀粒を見せた。老人がこれ迄に見たもの〻中でこれに似たものは何一つなかつた。實際彼れは今では殆どそれを見ることも出來なかつたが、半は眼の力で見、半は手でそれに觸つて見た。そこで皇帝は彼に訊ねた。

『祖父や、其方は何處に斯んな穀物が出來たか知つて居るか？其方は之に似たやうな穀物を畑に蒔いたことがあるか。或はこれ迄に之に似たやうな穀物を買うたことがあるか？』

老人は聾者であつた。そして言葉を聞くにも了解するにも非常に骨が折れた。それ故その返事も遲かつた。

『いゝえ。』と彼は遂に言つた。『つひぞ私は斯のやうな穀物は畑に蒔きましたこともございませず、

斯樣なものを收穫れたことも買うたこともございません。私共が穀物を買ひました時はみな細かい小さなものでございました。併し、』と彼は尙ほ言葉を續けた。『私の親父にお訊ねになりましたら宜しうございませう。親父ならば何處に斯樣な穀物が出來ましたか聞いて居るかも知れませぬ。』

そこで皇帝は其老人を遣つて彼の父を連れて來させた。そして其老人の父を自分の面前に連れて出るやうに命じた。老人の父は都合よく見付かつたので、皇帝の面前に連れて出された。彼は一つの撞木杖に縋つた丈けで跛を引き乍ら入つて來た。皇帝は彼に其の穀粒を見せた。其老人は未だ眼を使ふことは出來たので、それを極めてはつきりと見ることが出來た。そこで皇帝は彼に訊ねた。

『祖父や、此の樣な穀粒は何處で出來たか其方は知つて居るか？其方はこれに似た樣な穀物を畑に蒔いたことがあるか？或は似た樣な穀物と何處ぞ他所から買つたことがあるか？』

『いゝえ。』と彼は言つた。『私は斯の樣な穀物は蒔いた事も收穫れた事もございません。又買つたこともございません。私の若い時分にはお金といふものが未だ商賣に使はれて居りませんなんだので。誰でも自分の麵麭は自分で造りました。そして他に入用のものは互に分け合ふやうにしました。私には斯の樣な穀物が何處に作られたものか分りません。私共の作りました穀粒は今あるものよりはもつと大きうて粉も澤山出來ましたが、斯のやうな穀粒はつひぞ見たことがございません。併し私は私の親父が若い時分には私共の作るのよりはもつと良い穀物が收穫れられたものだ。そしてそれはもつと大き

くて粉も澤山に出來たものだと言うて居たのを聞いたことがございます。彼をお呼びになつてお訊ねになりましたがよろしうございませう。』

そこで皇帝は此の老人の父を呼びにやつた。老人の父は直ぐに見付かつたので、皇帝の面前に連れて出された。彼は全く撞木杖をつかずに――實の所、樂さうに歩いて――入つて來た。そして彼の眼は未だはつきりとして、物の言ひやうも明瞭であつた。皇帝は彼に穀粒を見せた。すると老人はそれを幾度となくひつくり返しては見た。

『あゝ。』と彼は言つた。『此の樣な昔の穀粒を見てから實に久しいことになります！』それから其穀粒を嚙み碎いてその小さな片を嚙みしめて見た。

『同じものでございます。』と彼は叫んだ。

『それでは祖父。』と皇帝は言つた。『何處に、又何時斯の樣な穀物が出來たか話して聞かせてくれ。其方が此の樣な穀物を畑に蒔いたことがあるか。或は其方が若い時分に何處かでそれを買つたことがあるか。』

すると老人は答へた。

『私の若い時分には斯のやうな穀物が至る所で收穫れられました。私が自ら生きて居りますにも人を養うてやるにも斯ういふ穀物を食べてでございました。斯ういふ穀物を私は蒔きもし、刈りもし、

挽きも致しました。』

そこで皇帝は更に彼に訊ねた。

『祖父、斯の樣な穀物を何處かで買ひ、また自分の畑にも何時でも蒔くのが習慣であつたか？』

老人は微笑つた。

『私の若い時分には、』と彼は言つた。『穀物を買つたり又賣つたりするやうなさういふ大きな罪惡を犯さうと思ふ者は誰も居りませなんだでせう。私共は錢といふものは全く知りませなんだ。誰でも自分の要るだけの穀物は持つて居りました。』

そこで皇帝は更に復彼に訊ねた。

『これ祖父、其方が斯ういふ穀物を蒔いたのはどういふ所にだつたか――一體、其方の畑といふのは何處にあつたのか？』

すると其老人は答へた。

『私の畑は神樣の畑でございました。私の耕しました所は私の畑でございました。土地は誰の所有といふことはなく、誰もそれを自分のだと言ふ者はありませなんだ。人が自分の所有と言ふのは、自分の手でする其仕事だけでございました。』

『それでは俺に尙二つの事を話して聞かせてくれ。』と皇帝は言つた。『第一に、斯のやうな穀物が以

前には出來て今では出來ぬといふのは如何いふ理由ぢや。次に、其方の孫は二つの拐杖に縋つて歩いて居るし、其方の息子は一つで歩いて居る。それぢやのに其方は何も無くて樂々と歩いてゐるのは如何いふ理由ぢや。又それだけではなく、其方の眼は未だはつきりとして居るし、齒は丈夫だし、話し振りもまだはつきりとして優しいのはどういふ理由ぢや。此の二つの事の理由を私に聞かせてくれ。』

そこで老人は答へて言つた。

『その二つの事の理由は、人が自分等の勞働丈けで生きて行くことを止めて、隣人の物を欲しがり始めたからでございます。昔はさういふ風にして生きては居りませなんだ。昔は人々は唯神樣のお言葉通りにして生きて居りました。彼等は自分の身を支配して、他の人の物を妄りに欲しがりはしませなんだ。』

教子

『目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へること有るは爾曹が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん、惡に敵すること勿れ。』

（馬太傳第五章第三十八、三十九）

『仇を復すは我に在り。われ必ず之を報いん。』

（羅馬書第十二章第十九）

一

或る貧乏な農夫に男の兒が生れた。彼は非常に喜んで、近所の人の所へ出掛けて行つて、教父（洗禮の時の名づけ親）になつて貰ひたいと親んだ。併し其の近所の人は貧乏人の子供の教父にはなりたくないといふのでそれを斷つた。そこで子供の父親は他の近所の人の所へ行つて同樣に賴んだ。が、此の人も亦斷つた。

實際の所、其の農夫は村中を廻つた。併し誰も教父になつてくれようとはしなかつた。止むを得ず

彼は何處か他所へ賴みに行かなければならなくなつた。他の村への行き道に彼は一人の旅人に出會つた。出會ふと其の旅人は立停つた。

『今日は。』と彼は言つた。『何方へお出掛けかな?』

『神樣が子供をお授け下さいましてな。』と農夫は答へた。『斯ういふものがあれば私の元氣な中は此の身の喜びだし、年を取つてからは慰めにならうし、死んでからは私の靈魂の紀念物になるといふものです。ところが私が貧乏してゐるもので、村で誰も敎父になつてくれようといふ人がありません。それで今何處かへ敎父を搜しに行くところです。』

『私を敎父にしなさい。』と其旅人は言つた。

農夫は喜んだ。そして彼に禮を言つて、それから訊ねた。『それでは、敎母(女の名づけ親)の方は誰に賴んだものでせう?』

『私の知つてゐる商人の娘が好い。』と旅人は答へた。『町へお出でなさい。四辻に向つてゐる中に店の幾つもある石造の家があります。其處へ入つて行つて主人に、娘さんを敎母にさせて下さいとお賴みなさい。』

農夫はこれには同意し兼ねた。

『併し、』と彼は言つた。『立派な御商人さんを行つて訪ねる私は一體何でせう?其人は嫌な顏をして

唯振向いて、娘さんをそれにさせることはお斷りなさるでせう。』

『それはお前さんの罪ぢやなからう。行つてお賴みなさい。私も其處へ行きますよ。』

そこでその貧乏な農夫は先づ家に歸つた。それから町の商人の所へ出掛けた。彼は其處へ着いて庭に馬を繫いでゐると、商人自身が出て來た。

『何御用ですね?』と彼は言つた。

『旦那、斯ういふことでございます。』と農夫は答へた。『神樣が私に子供をお授け下さいました。斯ういふ者があれば私の元氣な中は此の身の喜びですし、年を取つてからは慰めになりませうし、死んでからは私の靈魂の紀念物となるといふものでございます。どうぞ御宅のお孃さんを敎母にさせて下さいまし。』

『洗禮は何時あるのだね。』

『明日の朝でございます。』

『それならそれで宜しい。御機嫌よう。明日家の娘が洗禮式に行くでせう。』

斯ういふわけで、間違ひなく其翌朝、敎父母は來た。そして子供は洗禮を受けた。併し洗禮が濟むや否や、敎父になつた男は二度と姿を見せず行つて了つた。彼等はそれから一度も彼を見掛けなかつ

た。

二

其子供がだん〳〵成長くなるに連れて、親達は喜んだ。それは其子が丈夫で、勉強家で、恰悧で、又柔和しかつたからであつた。十歳になつた時親達は彼を字を習ひに遣つた。すると他の子供が五年も掛ることを一年で覺えて了つた。彼の學習は直に濟んで了つた。

或年の復活祭の前週に其の子供は毎年するやうに敎母の所へ行つて、彼女に復活祭の接吻をした。併し彼は家に歸つて來ると言つた。

『お父さん、お母さん、私の敎父さんは何處にゐるの？私は行つて復活祭の御祝ひを言ひたい。』

併し彼の父は言つた。『お前の敎父さんは何處にゐるか分らないのだ。お父さん達だつて度々それを氣にしたのだがね。お前の洗禮のあつた日から以來一度も會つたこともなし、噂を聞いたこともないんだよ、だから其人が何處にゐるといふことも、生きてゐるかどうかといふことも、ちつとも分らない。』

すると子供は父親と母親の前に膝付いた。

『私に其人を搜しに行かせて下さい。』と彼は言つた。『搜しあて〻復活祭のお祝が言へるかも知れないから。』

そこで父も母も子供に行くことを許した。子供は敎父を搜しに出て行つた。

三

彼は家を出てから大道をずん〳〵歩いて行つた。そして半日程歩いて行くと一人の見知らぬ人に出會つた。

見知らぬ人は立止つた。

『今日は。』と彼は言つた。『何處へ行くのかね？』

『今朝、』と子供は答へた。『私は敎母さんの所へ行つて復活祭のお祝を言つたの、それから家へ歸つてお父さんやお母さんに、私の敎父さんは何處へゐるの？私は其處へも行つて復活祭のお祝を言ひたい。』つて訊いたの。けれどお父さんやお母さんは、『坊や、私たちでもお前の敎父さんが何處にゐるか知らないのだよ。お前の洗禮が濟むと直に家を出て行つて了つた。だから私達は其人の事は何も知らないし、其人が生きてゐるかどうかも知らない。』つて言ふんです。けれども私はどうかして敎父さんに會ひたくて、今其人を搜しに出て來たのです。』

すると其の見知らぬ人は言つた。『私がお前の敎父なのだよ。』

子供は一方ならず喜んだ。そして直に其の敎父に復活祭の接吻をした。

『だけれど、伯父さんはこれから何處へ行くの。』と彼は訊ねた。『私の家の方へ行くんなら、私と一緒に家へ來て下さい。それとも伯父さんの家へ行くんなら、私も一緒に行かせて下さい。』

『いや、私は今お前の家へ行く暇はない』と敎父は答へた。『村に用事があるのだよ。けれど明日は家へ歸つてゐる。だからお前は明日私の所へおいで。』

『それで、どう行つたら好いの。伯父さん？』

『日の出の方へ向つて眞直に歩いておいで。さうすると或る森に來る。其森の眞中に開いた土地がある。其處へ坐つて息んで、どんな事が始まるかよく見ておいで。それから森を出ておいで。さうすると目の面に庭が見える。其の庭の中に黃金の屋根のある亭がある。それが私の家だよ。庭の門のところまで眞直に歩いておいで。其處でお前に會はうよ。』

敎父は斯う言つた。と思ふと敎子の眼には見えなくなつて了つた。

四

そこで子供は敎父に敎へられた道を辿つて行つた。彼はずん〳〵行つて、終に其の森に着いた。それから其の眞中にある小さな空地に着いた。此空地の眞中に松の樹が一本立つてゐて、その一つの枝に繩が結び付けられて居り、繩の一つの端には三ブード（四十露磅）程の重さの樫の丸太が付けられて

ゐた。其の丸太の眞下に蜂蜜が一桶置いてあつた。子供が何故蜂蜜がこんな所にあるのだらうと怪しんでゐる丁度其時、森の中からバチ〳〵といふ音が聞えた。と思ふと何匹かの熊が彼の方へ近づいて來るのが見えた。一番先に母熊が歩いて來た。其の後には今年生れたばかりの子熊が從いて來、其の後からは復三匹の子熊がやつて來た。母熊は鼻を上げて四邊を嗅ぎ廻した。それから子熊を後に引連れて其桶の方へ眞直にやつて來た。先づ母熊が桶の中に鼻を突込んだ。そして子熊を呼び寄せた。彼等は皆走つて來て、蜂蜜を甜めに掛つた。が、その爲めに丸太が少し搖れた。そしてそれが搖れ戻つて來たので、子熊共は傍へ避けた。これを見ると母熊は足で再び丸太を押し遣つた。此度は前よりも搖れ方が大きくなつて、戻つて來た時にそれが一匹の子熊を打つた——一匹は頭を打たれて今一匹は背を打たれた——そこで彼等はキャッと叫んで跳び退いた。これを見ると母熊は怒つた。そして前足を兩方丸太に擧げでそれを頭の上に持ち上げた。そして向ふへ拋り投げた。丸太は高く搖れた。直に嬰兒の熊は桶の所へ跳んで行つて蜜の中に鼻を埋めて、そしてガブ〳〵と飲んだ。其の中に他の子熊も戻つて來た。併し、彼等が桶へ着かぬ中に丸太は飛んで戻つて來て、嬰兒の熊の頭を打つた。そして其場で彼は死んで了つた。母熊は今迄よりも更に怖ろしい唸聲を立てゝ、其丸太を摑み、力一ぱいに拋り投げた。丸太は高く高く飛んだ——枝よりも高く飛んで、殆ど繩を切らうとした。それから母熊は桶の傍へ寄つた。子熊共も其後からついて行つた。丸太は高く高く飛んだが、やがて止つて下

り始めた。それは低くなるに連れて益々ひどく動いた。益々速く飛んで來てとう〳〵母熊に打かり、頭を打碎いた。母熊は轉倒して足を伸ばして死んで了つた。そして子熊共は逃げ去つて了つた。

五

子供は今の光景に愕いたが、尙ほ歩いて行つて遂に大きな庭へ來た。庭の眞中には黃金の屋根のある高い立派な亭があつた。庭の入口の門の處には彼の敎父が微笑つて立つてゐた。彼は子供に會釋して、中へ連れて入り、庭を横切つて行つた。子供は今迄に、夢にさへも、此の庭の中にあるやうな美しいもの、喜ばしいものは見たことがなかつた。

それから敎父は彼を亭の中に連れて行つた。亭の內部は庭で見たものよりも未だ美しかつた。どの室へも敎父は案內した——一つは一つと愈々美しく、愈々心を恍惚させるやうであつた——遂に彼は子供を閉ぢられた戸の所まで連れて來た。

『此の戸が分るかな?』と彼は言つた。それには鎖は卸してない——唯封印がしてあるだけだ。それを開ければ開くが、併しお前は開けてはならんよ。お前は此處にゐて遊んでも好い。何處へでも好きな所へ行つて好きなやうに遊ぶが好い。そして樂しめるものを何でも樂しむが好い。併し唯これ丈け言つて置くが——此の戸の中へは決して入つてはならんよ。若し入るやうなことでもすれば、今森

の中で見たことをよく覺えて居れよ。』

敎父は斯う言つたかと思ふと、もう見えなくなつた。子供は唯一人後に殘されて非常に幸福に何不足なく暮した。その爲め彼は自分には僅か三時間程其處にゐた位に思はれたのであるが、實は三十年其處で過したのであつた。この三十年目の終になつて、この敎子は閉ぢられた戸の傍へやつて來て、心の中で考へた。『何故私の敎父はこの室に入ることを私に禁じたのだらう?今中へ入つて、何があるか見たらどんなものだらう?』

そこで彼は戸を押した。すると封印が割れて其戸は開かれた。入つて見ると、他の室よりはもつと大きなもつと立派な室が幾つもあつて、其の眞中に黃金の王座が置かれてあるのが目に付いた。彼は多くの室を通り拔けてずん〳〵行つて、とう〳〵其の王座の所まで來た。階段を昇つて行つて彼は其の上に坐つた。坐つたと思ふと、王座に凭せ掛けてある一つの笏が彼の眼に入つた。彼はこの笏を手に取つた——すると、どうであらう?忽ちの中に周圍の室の四方の壁は悉く滑り落ちて、彼には周圍一體が見えて來た。そして一目で世界の全體、其中で多くの人が仕事をしてゐるのを悉皆見ることが出來た。彼の前には海と其上を進んで行く船とが見えた。右の方にはあらゆる外國の、異敎徒の生活が見えた。左の方には露西亞人でない凡ての基督敎の國の人々のしてゐる事を見ることが出來た。そして最後に、第四の側には、彼は我々露西亞の國民の生活してゐる狀をみることが出來た。

『一つ』と彼は獨り考へた。『私の家でどんな事が起つてゐるか、作物がよく出來たかどうか見てやらうか。』

さう思つて彼は自分の家の畑の方を見た。すると藁束が其處に積まれてゐるのが見えた。そこでそれが幾つあるか見ようと思つて彼は勘定し出した。勘定してゐると荷車が畑の中を行くのが見えて、その中には一人の農夫が坐つてゐた。初めは彼は父が夜家に穀束を持つて行くのに違ないと思つて見てゐたが、今一度見ると、車を曳いて行くのは盗賊のワシリイ・クヅリヤショフだといふことが分つた。彼は穀束のある所まで車を曳いて行つて、それを車に積み始めた。敎子は之を見ると夢中になつて叫んだ。『お父さん！人が畑から穀束を盗んで行くよ！』

彼の父は眞夜中に眼が覺めた。『何だか今家の穀束が盗まれる夢を見た。』と彼は言つた。『一つ行つて見て來ようか。』さう思つて彼は馬に乘つて出て行つた。畑へ來て見ると果してワシリイが其處にゐたので、彼は驚いて大聲を出して叫んだ。他の農夫達も出て來た。そしてワシリイは打たれて縛られて牢獄へ引張つて行かれた。

次に敎子は敎母の住んでゐる町の方を見た。すると今では彼女が或る商人に結婚してゐるのが見えた。彼女は其處に眠つてゐた、ところが彼女の夫は既に寢床から出て情婦の室に忍んで行くところであつた。それを見ると敎子は其の商人の妻に大聲で叫んだ。『お起きなさい、旦那さんは惡い事をするところですよ。』

彼の敎母は寢床から跳び起きて、衣服を着換へ、夫を捜しに行つた。彼女は夫をひどく羞ぢさせ、其の情婦を打ち、そして夫を戸の外へ押し出した。

それから其敎子は母はどんなにしてゐるだらうと思つて見た、すると彼女は家の中で眠つてゐるのが見えた。俄に盗賊が入つて來て彼女の錠を下した箱を破り始めた。此の時忽ち母は眠を覺まして大聲で叫んだ、すると盗賊は手斧を取つて彼女の上にそれを振上げ、今にも彼女を殺しさうに見えた。

敎子はじつとしてはゐられなくなつた、そして其處にあつた笏を盗賊を目がけて投げ付けた。それは丁度うまく彼の顳顬に當つて、彼は其場で死んで了つた。

六

敎子が盗賊を殺したと思ふと、亭の壁は再び閉ぢて、四邊は復舊の通りになつた。

すると戸が開いた、そして敎父が入つて來た。彼は敎子の所へ行つて、彼の手を取り、そして彼を王座から引き下した。

『お前は私の命令に從はなかつたな。』と彼は言つた。『一つお前のしてならないことをした。お前は開けてはならぬといふ戸を開けたな。も一つお前のしてならない事をした、お前は王座に上つて行つ

て私の笏をお前の手に取つたな。第三にお前のしてならない事をした、お前は世の中に大へん惡い事を惹起した。若しお前がもう一時間彼處に坐つてゐたら、お前は世界中の人間の半分を滅ぼして了つたらう。』

それから、敎父は其の敎子を復王座に連れて行つて、手に笏を取つた。再び壁は滑り落ちて、全ての世界が目前に現れた。

『第一にお前がお前のお父さんにしたことをご覽。』と敎父は言つた。『ワシリイは一年の間牢屋に入れられた、そして其處であらゆる惡い事を覺えて、他の人々を憎むやうになつた、それ、ご覽、彼はお前のお父さんの馬を今復二匹盜んだ、そして今これから其の畑に火を放けようとしてゐる。それがお前がお父さんにした事だ。』

併し、敎子が父の畑が今燃え上るのを見たと思ふ間もなく敎父は其の場景を隱して了つて、彼にもう一つの方面を見させた。

『彼處をご覽。』と彼は言つた。『お前の敎母が夫に見捨てられてから一年經つたところだ。夫は他の女共と傍で遊んで居る。敎母は悲しみの餘り酒に溺れてゐる。そして夫の以前の情婦は全く身を滅ぼして了つた。それがお前がお前の敎母にしたことだ。』

その中にその場景も亦敎父の手で隱されて了つた。そして今度は彼は敎子の家の方を指した。家の

內には彼の母が坐つて、自分の犯した罪を悔いて泣いて、斯う言つてゐた。『盜賊が私を殺してくれた方がどんなにか良かつたでせう。さうすれば私の罪は未だ輕かつたでせう。』

『あれがお前がお母さんにしたことだ。』と敎父は附加へて言つた。それから彼は亦此の場景を隱して了つて、この下を指した。其處にはその盜賊が地下牢獄の前に立つてゐて、獄吏が彼を動けぬやうに抑へてゐるのが敎子の眼に映つた。

敎父は敎子に言つた。『此の男はこれ迄に九人の人を殺したのだ。お前が彼の男を殺さなかつたら彼はこの多くの罪の贖ひをしなければならなかつたのだ。併し今となつてはお前はその罪を自分に著て了つた。だからお前はその罪を贖はなければならぬ。それがお前が自分の身にしたことだ。』

それから敎父は尙ほ言葉を續けた。

『初めあの年取つた母熊が丸太を押し遣つた時には、唯子熊共を少し驚かせた丈けだつた。二度目にそれを押し遣つた時にはその爲めに嬰兒の熊を殺して了つた。併し三度目にそれを押し遣つた時にはとう〳〵自分の身を殺して了つた。お前のしたことも丁度其の通りだ。だが私は今お前に三十年の暇をやるから其間に世の中へ出て行つて、あの盜賊の罪を贖つて來い。若し其の間にお前がその贖ひをしなかつたら、お前もあの盜賊の行つた所に行くことになるだらうぞ。』

そこで敎子は言つた。『どうしたら私は彼男の罪を贖へませう？』

教父はそれに答へて言つた。お前が世の中に作つた丈けの惡い事を世の中から取去つたら、其時はあの盜賊の罪を贖つたことにならう。』

『けれども。』と教子は訊ねた。『どうしたら私は世の中の惡い事を取去ることが出來ませう。』

『日の出の方へ向つておいで。』と教父は答へた。『さうするとお前は多勢人のゐる野に出る。その人達が何をするかよく見ておいで、そしてお前が自分に學んだことをその人達に敎へてやれ。それから尙先きへ眞直においで、矢張りどんなものがあるかよく氣を付けておいで、さうすると四日目に林に行着くだらう。其の林の中に一つの隱者の庵がある。其の庵の中には一人のお爺さんが住んでゐる。そのお爺さんにお前の身に起つて來た罪をお話し。するとお爺さんがお前に物を敎へてくれよう。その人がお前に命令ける事を悉皆お前がして了へば、それでお前は盜賊の罪も自分の罪も兩方共贖つたことにならう。』

教父は斯う言つて、彼を入口の門から出して遣つた。

七

教子はずん〳〵歩いて行つた。そして歩き乍ら獨り心の中で考へた。『どうして私は世の中から惡い事を取除かなければならんのでせう？世の中は惡い人間は遠くへ追放つたり、牢獄に入れたり、死刑

にしたりして惡い事を取除いてゐる。それならば、どうして自分に他の人の罪を背負はないで私が世の中の惡い事を取除くことが出來よう？』

斯んな風に彼は考へに考へた。が、この疑問を解くことは出來なかつた。

彼はずん〳〵行つた。そして遂に或る野に來た。穀物はよく實つてもう收穫するばかりになつてゐた。不圖彼には一頭の仔牛が穀物の中に迷ひ込んで、それを見た農夫達が馬に乘つて畑の片側から彼側へ牛を逐ひ出さうとしてゐるのが見えた。仔牛が畑から出て來ようとすると、一人の男が馬に乘つて來るので、仔牛は恐れて復元へあと戻りした。すると馬に乘つてゐる男は復それを追ひかけて畑の中を駈け廻るのであつた。其の間絕えず一人の老婆が大道に立つて泣いてゐた。そして『私の牛はあんなにされて死んで了ひます。』と叫んでゐた。

そこで教子は農夫達に呼びかけた。

『何でそんなに乘り廻るんです。みんな畑を出ておいでなさい。さうすりやお婆さんが牛を呼び戻すのに。』

農夫達は彼の勸めを聞入れた。すると老婆は畑の椽へ出て來て大きな聲で叫んだ。

『來い。來い。暴れ者！此處へ來いや！』仔牛は耳を欹てゝ聞いた。少時聞いてゐたが、やがて老婆の所へ跳んで來て、頭を老婆の衣服の裾に押し付けて、殆ど彼女を倒さうとした。そこで農夫達も

老婆も、仔牛までも皆喜んで其事は濟んで了つた。

敎子は尙歩いて行き乍ら獨り考へた。

『惡は惡を以て取除くことは出來るものでないといふことが分つた。人が惡い事に返報をすればする程惡い事は擴がつて行く。したら何でそれを取除くことが出來るか私には分らない。仔牛がお婆さんの言ふことを聞いたのは良い。若し、あの仔牛が聞かなかつたら、お婆さんはどうして畑からあれを引出すことが出來よう。』

敎子は歩き乍ら斯んな風に考へた。

八

尙彼はずん〳〵歩いて行くと、遂に或る村に着いた。其處で彼は取付きの家に一晩の宿を乞うた。

すると家婦が出て來て泊めてくれた。家の中には彼女一人限りで、家や道具を洗つてゐた。

敎子は家に入ると、靜かに暖爐の所へ行つて、女が何をしてゐるのか立つてじつと見てゐた。彼女は床を洗つて了つてから卓子を洗ひに掛つた。先づ彼女はそれを悉皆洗ひ濯いでから、乾いた雜巾で拭ひ始めた。彼女は一通り力を入れて擦つたが、汚れた雜巾が表面に筋を殘して、綺麗にならなかつた。そこで今一度擦つて其筋を拭ひ消したが復新しいのが付いた。最後に縱に擦つて戻したが、矢張り汚

れた雜巾が其の表面に新に筋を殘すだけのことであつた。所々塵は拭ひ消されるが、他の塵が一層强く記されるのであつた。

敎子は少時彼女のするのを見てゐたが、遂に言つた。

『お内儀さん、貴女は何をしてゐるんです?』

『分りませんか?』と彼女は言つた。『私はお祭りの支度に拭掃除をしてゐるのです。けれど疲れてゐるせいか、此の卓子を綺麗にすることが出來ません。』

『それなら第一に雜巾を濯いで、それから卓子を拭かなければだ可けませんよ。』

女は言はれた通りにした。すると直に卓子は綺麗になつた。

『有難うございました。』と彼女は言つた。『好い事を敎へて戴いて。』

翌朝敎子は宿の女に別れを告げて、尙先へ進んで行つた。彼はずん〳〵歩いて行くと遂に或る林に來た。其處では數人の農夫達が車の外輪にする木を曲げてゐた。敎子は傍へ寄つて見ると、農夫達が幾度其の臺の周圍を廻つてゐても木が少しも曲らないことを知つた。そこでよく注意して見てゐると、その臺には留針がないために臺は彼等の廻る通りに廻つてゐる。それが爲め木が曲らないでゐるのが分つた。彼はそれに氣が付くと直に言つた。

『皆さん、あなた方は何をしてゐるのです?』

『車の外輪にする木を曲げてゐるのさ。』と彼等は答へた。『私等は二度も此木を水に浸して、私等はもう疲れ切つて了つたのだけれど、どうしても曲らない。』

『それなら第一に臺をしつかりさせなければ可けませんよ。』と敎子は言つた。『さうすれば木はあなた方が廻すに連れて撓るでせう。』

これを聞いて農夫達は臺をしつかりさせた。それから仕事は難なく運んだ。

敎子は彼等の所で一晩を過して、それから復出掛けて行つた。一日一晩歩いて行つたところが、丁度夜明前に彼は牛商人達に追付いた。そして彼等の傍に横たはつて休んだ。彼は彼等が牛を杭に繋いでこれから火を焚かうとしてゐるところだといふ事が分つた。彼等は枯枝を取つて來てはそれに火を點けてゐた。併し漸く火が燃え上つたと思ふと、彼等はその上に濡れた柴を載せた。柴はシュッと言つて火は消えて了つた。幾度か牛商人等は枯枝を取つて來ては火を點けた。併し何時もその上に濡れた柴を積むので、火は消えて了ふのであつた。永い間彼等は骨折つてして見たが、どうしても火を燃え付かすことが出來なかつた。

遂に敎子は言つた。『そんなに急いで柴を積まないやうにおしなさい。初めに火を搔き立てゝよく起しなさい。そしてよく燃え上つた時に柴をお燻べなさい。』

牛商人達は言はれる通りにした。先づ彼等は火を可成り燃え上るまで搔き立てゝ、それから柴を挿

入れた。すると柴にうまく火が點いて、全體ボーッと燃え上つた。

敎子は暫く彼等と一緒にゐた。が、それから復先へ進んで行つた。彼は何で此の三つの事を見たものかと頻りに怪んだ。併しその理由はどうしても分らなかつた。

九

其日全一日彼は先へ〳〵と進んで行つた。ところが遂に隱者の庵のある森に着いた。彼は其の庵に近付いて行つて、戸を敲いた。すると中から聲がして『誰かの？』と彼に言つた。

『大變な罪人です。』と敎子は答へた。『他の人達の罪を贖ひに此處まで來た者です。』

『其方に着せられたのは他の人のどんな罪ぢや？』

そこで敎子は彼に事の次第を悉皆話した——敎父のこと、母熊と子熊のこと、閉ぢられた室の王座のこと、彼は敎父が自分に與へた命令、それから彼が畑で會つた農夫等のこと、彼等が穀物を踏み荒してゐた事、それから仔牛が獨自に老婆の所へ走つて來たことなど悉皆話した。

『その時初めて、』と敎子は言つた。『私は惡は惡を以て取除くことの出來るものでないといふ事を悟りました。併し未だ何でこれを取除いたら好いものかといふことは私には解りません。どうぞ、それを敎へて下さい。』

すると老人は言つた。『だが、先づ其方の來る途中で他にどんな事があつたか私に話しなさい。』

そこで敎子は女が卓子を洗つてゐたことも農夫達が車の外輪を曲げてゐたことも、牛商人達が火を燃してゐたことも皆彼に話した。老人は彼の言葉を聞いて了ふと、庵に戻つて行つた。そして中から小さな刄の付いた斧を持つて來た。

『私についておいで。』と彼は言つた。

彼は庵を出ると空地を通り抜けて行つた。そして一本の樹を指した。

『あれを伐れ。』と彼は言つた。

そこで敎子は斧を打付けた。すると樹は倒れた。

『それではそれを三つに裂け。』

敎子は言はれる通りに裂いた。すると老人は復庵に戻つて行つて、其處から炬火を持つて歸つて來た。

『その三つの木片に火を點けろ。』と彼は言つた。

そこで敎子は其の炬火を取つて三つの木片に火を點けた。遂にそれ等は燃えて其處には三つの黑く焦げた木の株だけが殘つた。

『さあそれを皆半分丈け地に埋めろ。』

敎子は命令られた通りにそれ等を埋めた。

『あの丘の下に、』と老人は續いて行つた。『河は流れて居る。其處へ行つて口に水を啣んで來い。そしてそれをこの木の株に振りかけろ。初めの株には其方が小屋の中の女に敎へたやうに振りかけろ。二番目のには其方が車の輪を造つてゐた者共に敎へたやうに振かけろ。それから三番目のには其方が牛商人達に敎へたやうに振かけろ。此の三つの株にみな芽が出て、切株から林檎の林に變る時に、その時にどうしたら人々の中にある惡を取除くことが出來るか知らせてやらう。そして其方も亦自分の罪の贖ひが出來るぢやらう。』

老人は斯う言つて、復庵に戻つて了つた。敎子は其間種々に考へて見たが、併し老人の言つたことは了解することが出來なかつた。が、兎も角も彼は命ぜられた通りの事をしに取掛つた。

一〇

彼は河へ行つて、口に一ぱい水を啣んで戻つて來た。そして第一の株に振りかけた。二度目三度目と行つて來て、他の二つにも水を振りかけた。其時になつて彼は疲れて空腹じくなつて來た。そこで庵に行つて老人に食べるものと飲むものを貰はうと思つた。ところが、戸を開けるや否や、老人は既に死んで祈禱臺の上に倒れてゐることが分つた。敎子は四邊を見廻した。が、漸く少しばかり乾いた

ビスケットを見付け出したので、彼はそれを食べた。それから又鋤も見付けた。そこで其老人の爲めに墓を掛りに掛つた。彼は夜は水を取つて來て切株に振掛け、晝は墓を掘つて過した。彼が丁度それを掘り終つて、老人を埋めようとしてゐると、其處へ近所の村から農夫達が此の年取つた隱者に食物を贈物にしようとやつて來た。

村人達は老人が死んで了つたことを知り、又老人はこの教子を後繼者として立てたものとばかり信じて、皆手助けして老人の死骸を埋め、自分等の持つて來た食物は教子の食べるようにと其處へ置いて、尙後から持つて來るからといふ約束をして何れも歸つて行つた。

そこで教子は死んだ老人の庵にゐて、村人の持つて來た食物を食べ、命ぜられた通りのことをして生活してゐた——それは河に行つて口一ぱいに水を啣んで來て木の株に振りかけることであつた。

彼は斯ういふ風で一年を暮した。そして多くの人々が彼の所へ來るやうになつた。それは丘の下から口に水を啣んで來て三つの焦げた木の株にそれを振りかける一人の聖者が森の中で信仰の生活をしてゐるといふことが方々へ知れ渡つたからであつた。非常に多くの人が彼を訪ねて來た。有福な商人達までが贈物を持つて來た。併し教子は必要以外の物は何一つ受取らなかつた。それ以外に彼が貰ふ物は皆貧乏人に呉れて了つた。

そこで彼の生活は斯んなものであつた。半日は彼が口に水を啣んで持つて來て木の株に水を振りかけることに費し、後半日は息んで訪ねて來る者の應接をすることに費すといふ風であつた。其の中に彼はこれが實際自分の命ぜられた生活の道に違いない、斯ういふ生活をしてゐれば自分は世の中の惡い事も除き去り、自分自身の罪の贖ひも出來るのだと信ずるやうになつた。

二年目も木の株に水をかけぬ日は一日もなくして過ぎた。併し三つの株の中どれもまだ芽を吹き始めたものはなかつた。

或時彼は庵の中に坐つてゐると、一人の男が馬に乘つて獨り歌を歌つて來るのが聞えた。どういう風の人だらうと思つて出て見ると、一人の立派な丈夫さうな若い男が好い衣服を着て高價な馬や鞍に跨がつてゐるのが教子の眼に付いた。そこで教子は彼に禮をして、どういふ用で來たのか、何處へ行くところであるかを訊ねた。其の男は馬を止めた。

『俺は追剝だ。』と彼は言つた。『路を馬で乘り廻して人を殺すのだ。人を殺せば殺す程俺の歌は面白くなるんだ。』

教子は恐ろしくなつた。そして獨り心に考へた。『斯ういふ人間の持つてゐる惡をどうして取除いたものだらう。私の所へ訪ねて來る者と相談することは私には容易いことだ。彼等は皆悔改めた者達だから。併し此男は自分の惡い事を誇りにしてゐる。』

併し彼は何も言はず、其男の傍に付いて歩き乍ら尙ほ考へ續けた。

『これからどうしたものだらう？若し此追剝が此道を行けば、村の人達を脅かして、彼等は私の所へは來なくなるだらう。さうすれば私は此の先何の用で此處に住んでゐることがあらう？』

そこで彼は立止つて其追剝に言つた。

『村の者が私の所に訪ねて來る――それは自分等の惡い事を誇りにではなく、悔改めて其の罪を赦して貰ふやうに祈りに來るのだ。お前さんも少しでも神を恐れる心があつたら、悔改めてはどうだ。併しさういふ心が無いなら何處か他の路へ行きなさい。そして此路へはもう決して來ないで欲しい。私の平和を亂したり村の人々を恐れさせないやうに。私の言ふことを聽かないと、屹度神樣がお前さんをお懲しになるよ。』

追剝は大聲で笑つた。

『俺は神樣も恐れなければ、お前の言ふことも聽くまいよ。』と彼は言つた。『お前は俺を支配する人間ぢやない。お前はお祈りや信心によつて生きてゐるのだが、俺は人殺しとして生きてゐるのだ。凡ての人間はどうにかして生きて行かなけりやならん。お前はお前の所に來る婆さん達に矢張り物を敎へてゐるが好い。だが俺に敎へようとはするな。いや、お前は今日俺に神樣といふものを思出させたのだから、俺は明日はもう二人殺してやる。俺は今此處でお前を殺してやるんだが、俺はこれで手を汚したくない。もう好いから、俺の邪魔をするな。』

斯う脅文句を言つて、追剝は行つて了つた。併し彼はそれからはもう此路の方へは來なかつた。そして敎子は尙八年の間舊のやうに靜かに生活して行つた。

二

或晩敎子は木の株に水を振りかけてゐた。それから庵に歸つて坐つて少時休んでゐた。彼は其處に坐り乍ら、誰か農夫が自分の所へ訪ねて來はしないかと思つて、細い森の道を眺めてゐた。併し其日は誰も來なかつた。そして敎子は夜になるまで一人其處に坐つてゐた。彼は疲れて來たので、自分の過去を考へ始めた。彼は追剝が自分の信仰の生活を罵つたことを思ひ出した。そして自分のこれ迄の事を悉皆思ひ起し始めた。

『私は神樣が私にさせようと思召された通りの生活をしてゐない。』と彼は思つた。『あの老人は私に懺悔の行をすることを命じたのだ。ところが私は其悔懺の行を麵麭を得たり名聞を得たりする資源として了つた。私はそれが爲めに誘惑されて、若し誰も訪ねて來ないと退屈するやうな有樣だ。然も人が訪ねて來れば、唯彼等が私の信仰深い事を賞めそやしてくれさへすれば喜んでゐる。斯んな生活をしてはならなかつたのだ。私は人の讚辭で迷はされて來たのだ。自分の過去の罪を贖ふどころではなく、私は更に新しい罪を釀してゐたのだ。私は森の中へ行つて了はう――他の人に見付からない何處

か新しした所へ行つて了はう、そして其處で、私の過去の罪の贖ひをし、新しい罪を決して釀さないやうに全く一人限りで生活さう。』

斯う敎子は心の中で考へた。そこで彼はビスケットの入つた小さな袋と鋤とを持つて庵を出て谷間の方へ出掛けて行つた。其處は彼が自分の爲めに土小舍を掘つて誰にも見付からぬ樣に身を隱さうと思つた、遠く人里離れた處であつた。

彼はビスケットの入つた袋と鋤とを持つてくゝ歩いて行くと、彼の方へ先の追剝が馬に乘つて走つて來た。敎子は驚き怖れた。そして逃げようとした。が、追剝は追付いた。

『何處へ行くのだ？』と賊は訊ねた。

敎子は何處か人の誰も來ない所に身を隱さうと思ふのだと答へた。これを聞くと追剝は驚いた。

『だが、どうしてお前は生きて行くつもりだ。』と彼は訊ねた。『誰もお前の所へ來ることが出來ないで。』

敎子は前にこんな事は更に考へてゐなかつたのだ。併し追剝に斯ういふ問を掛けられて見ると、彼は俄に食物のことを思ひ出した。

『屹度神樣がしなければならぬ事は敎へて下さるだらう。』と彼は答へた。

追剝はそれ以上には何も言はずに、自分の行く方へずんゝ行つて了つた。

『何を考へてなぞ居られよう。』と俄に敎子は思つた。『私は彼の生きて行く道に就いては何も言はなかつた。大方彼も今では悔改めて居るだらう。今日は優しさうに見えた、而て私を殺さうと脅かしなぞはしなかつた。』

そこで彼は追剝を呼び掛けた。

『まだ私は心からお賴みするが、どうか悔改めて下さい、お前さんだつて神樣から逃れることはどうしても出來るものではない。』

この言葉を聞くと追剝は馬を返して、帶にさしてゐた七首を掴み、敎子の上にそれを振翳した、敎子は恐ろしさに直に森に逃げ込んだ。が、追剝は追掛けては行かずに、斯う言つた。

『これで二度許してやつたぞ、老爺、だが三度目には、よく覺えてゐろ、殺して了ふぞ。』

之れ丈け言つて彼はずんゝ先へ行つて了つた。

其晩敎子は何時ものやうに木の株に水を掛けに行つた——すると、どうであらう！其株の一つには根が生えて、小さな林檎の樹が一本それから出來てゐた。

二

そこで敎子は全く人を避けて、愈々唯一人丈けの生活に入つた。僅か貯へて置いたビスケットも食

ひ盡して了つた時に彼は獨り思つた。『出て行つて木の根でも探して來なけりやならん。』併し彼がそれを探しに出るや否や、彼の前にあつた木の枝にビスケットの小さな袋が下つてゐるのが見えた。彼はそれ等を取つて食べた。ところが食べて了ふか了はぬに、又一つ小さい袋が同じ枝に下つてゐた。

斯のやうにして敎子は何一つ心を煩はす事もなく暮してゐた、が唯一つ心に掛ることがあつた、――それはあの追剝がやつて來るかといふ恐れであつた。彼は彼の追剝が來る音を聞く度に何時も身を隱して斯んなに考へた。『若し彼が私を殺すことになつたら、私は自分の罪を淨められずに死んで了ふのだ。』

斯ういふ風に彼は十年の間暮した。一つの木の株に生じた林檎の木は速かに成長した、併し後の二つの株は舊のまゝであつた。

或る日彼は朝早く起きて、木の株に水を振ける其仕事をしに出て行つた。彼はこの仕事を濟ませて了ふと、疲勞に堪へられぬやうな心持ちがした、そして坐つて休んだ、彼は其處に休んでゐる間に斯んな考が起つた。『屹度私はまだ罪を犯してゐるのだ、私は死ぬのが恐ろしくなつて來たもの。併し神樣は私に死といふことで罪の贖ひをおさせになるのかも知れぬ。』

彼が斯んな事を考へたかと思ふと、俄かに追剝が彼の方にやつて來るのが、そして何か罵つてゐる聲が聞えた。それを聞くや否や敎子は考へた。『神樣御自身の他は私に幸福も悲しみも與へることは出

來ない。』さう思つたので彼は盜賊に向はうと進んで行つた。

すると此度は追剝が一人で來たのではなく、後に一人の男を連れてゐることが分つた、そして其の男の手は繫られ口には猿轡を銜められてゐることが分つた。男は物を言ふことが出來なかつた、が、追剝は絕えず此男を罵つてゐた。敎子は彼等の方へ進み寄つて、乘つてゐる馬の前に立塞がつた。

『お前は何處に此人を連れて行くのだ？』と彼は言つた。

『森の中にだ。』と追剝は答へた。『此男は或る商人の息子だ、そして何處に親父の金が隱してあるかどうしても言はないのだ、それで俺は此奴が言ふまで打つてやらうと思ふ。』

さう言つて追剝は尙先へ進まうとした、が、敎子は手綱を攫んだ、そして先へ行かせなかつた。

『その人を放してやれ』。と彼は言つた。

追剝はこれを聞くと怒つた、そして敎子に拳を振り上げた。

『貴樣は此奴のやうにして貰ひたいのか。』と彼は訊ねた。『俺はずつと前に貴樣を殺してやると約束した。さあ通せ。』

併し敎子は今では少しも恐ろしいと思はなかつた。

『私は通さぬぞ。』と彼は言つた。『私はお前を恐れない、唯神樣を恐れる丈けだ、そして神樣は私にお前を引留めるやうにお命じになつたのだ。此人を放してやれ。』

追剝は眉に皺を寄せて、七首を摑んだ、そして綱を切つて、其商人の息子を放してやつた。

『二人共行つて了へ。』と彼は言つた。『もう俺の邪魔をしたら聞かぬぞ。』

商人の息子は馬から跳び下りて逃げて行つた、が、追剝が再び出掛けようとすると、敎子は尙ほ彼を引留めた、そしてさういふ惡い生活は棄てゝ了はなければ可かぬと彼は話してやつた。追剝は腰を下してじつと聽いてゐた、併し何とも答へず、又行つて了つた。

翌朝敎子は何時ものやうに木の株に水を注ぎに行つた、――すると、どうであらう！二つの中の一つに芽が吹いてゐた、そして其れから第二の小さな林檎の樹が生えてゐた。

三

又十年過ぎた。或る日敎子は心に何の煩ひも恐れもなく、明るい心持ちで坐つてゐる乍ら獨り考へた。『人は何といふ幸福を神樣から與へられてゐることだらう！それだのに彼等は平和に生活して居らねばならぬ筈の時を何の甲斐もなく自ら惱んでゐる。』

彼は人間の惡といふものゝ概略を考へて見た、又人は如何に何の目的もなく自ら苦しんでゐるかを考へて見た。そして彼は人々がひどく可哀さうになつた。

『私は斯んなにして生活してゐては可けないのだ。』と彼は思つた。『寧ろ出て行つて私の知つてゐる

事は人に聞かせてやるのが當然だ。』

斯ういふ考が彼の心に浮んだ丁度其時、復も彼の追剝が近づいて來る音が聞えた。初めは彼は此の盜賊を避けるつもりで斯う考へた。『此の男に何を言つたところで駄目だ。』

初めは斯う考へたが、忽ち心を變へて彼は路へ出て行つた。追剝はひどく氣落ちしたやうな樣子で首垂れて馬に乘つてやつて來た。敎子は彼を見上げるとひどく可哀さうになつた、そこで彼の側へ走り寄つて、彼の膝を捕へた。

『兄弟』と彼は叫んだ。『お前さんの靈魂を可愛がつてお遣り、お前さんの中にも神樣の與へられた靈魂はあるのだ。若しお前さんが此儘何時までも自分も苦しめ人も苦しめて居れば、屹度まだ惡い苦しみを先で受けなければならなるまいよ、それよりは神樣がどんなにお前のことを思うて居られるか、どんな幸福を神樣はお前の爲めに貯へて置かれたかと考へて見なさい！自分の身を滅ぼしては可けない、兄弟、お前さんのその生活を更へなさい。』

併し追剝は只眉を顰めた丈けで顏を反向けた。『うつちやつて置いてくれ。』と彼は言つた。

併し敎子は尙しつかりと彼の膝を摑んで、泣き出した。

すると追剝は眼を上げて敎子をじつと見た。彼は尙じろ〳〵と見てゐたが、俄に馬から滑るやうに下りて地上に膝付いた。

『お爺さん。』と彼は言つた。『お前はとう〳〵俺に勝つた。二十年の間俺はお前と敵同志だつた、併しお前はだん〳〵俺の力を奪つて了つて、今ではもう俺は自分の身さへ自由にならぬ。俺をごうでもお前の好いやうにしてくれ。初めてお前が俺に賴んだ時には俺は唯却て腹が立つた丈けだつた。俺がお前の言葉をよく考へるやうになつたのは、お前が人の眼を避けて、人の助けなぞは要らぬと言つた其時からだつた。その時から俺はお前の爲めにビスケットの袋を木の枝に懸け始めたのだ。』

其時敎子はあの卓子が綺麗にされたのは實に雜巾が濯がれたその時だつたことを思ひ出した。それと同じく彼の心が純潔にされて他の人の心も清くすることが出來たのは、實に自分の事を思ふことを止めた其時だつたのだといふことが分つた。

それから追剝は尙ほ言葉を續けた。

『併し俺の心が初めて實際變つたのは、お前が俺の手に掛つて死ぬことを恐れなくなつたその時だつた。』

直に敎子は彼の車の外輪を作つてゐた人々がその輪にする木を撓げることが出來たのは、實に彼等が其臺を固く据ゑ付けた其時だつたことを思ひ出した。それと同じく彼が死を少しも恐れなくなつたのは、自分が神に賴る生活を確立して自分の出過ぎた心を抑へたその時だつたのだといふことが解つた。

『そして』と追剝は言葉の結びに言つた。『俺の心が全く變つて了つたのは、お前の心が俺を憐れんで、お前が俺の前に泣いた其時だつたのだ。』

敎子は深く喜んで追剝を三つの木の株のある其場所に連れて行つた、――すると、どうであらう！第三の株からも林檎の樹が芽を出してゐた。

そこで敎子は、あの濡れた柴が燃え上つたのは牛商人達の火がパッと燃え付いた其時だつたことを思ひ出した。その通り又、彼の內にある彼の心も燃え上つたので、他の人の心にも火を點ぜられたのだといふことが彼には解つた。

彼は自分の罪が償ひ贖はれたことを實際に認めて喜んだ。

この事實を悉く彼は其の追剝だつた者に述べて死んだ。其男は彼を墓に埋めて、それからはこの敎子が彼に敎へた通りの生活をした、そして多くの人にも斯のやうに生活することを敎へた。

三人の隱者

（ヴォルガ地方の傳說より）

爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言ふなかれ、彼等は言おほきを以て聽かれんと意へり。この故に彼等に倣ふこと勿れ、爾等の父は求めざる先に其需用物を知りたまへばなり。（馬太傳六章七、八節）

或監督僧正がアルハンゲリスクからソロヴェッキイ修道院へと船出した。その同じ船には矢張り同じ土地の寺々へ參詣の途にある巡禮が大勢乘つてゐた。航海はおだやかだつた。風は追手であり、天氣は快晴であつた。巡禮たちは甲板に臥そべつて食事をしたり、三々五々寄集まつて四方山の話をしたりしてゐた。監督僧正もやはり甲板にやつて來た。そしてあちこちと漫歩きをしてゐると、船首に近く一團の人々が彳んで一人の漁夫の言葉をじつと聽いてゐた。その漁夫は沖を指差しながら何か話してゐた。僧正は足を止めて、漁夫の指差す方向を眺めた。けれど、何にも見ることが出來なかつた、海は日光でギラ〳〵光つてゐた。彼が聽耳を欹てゝ近づくと、これを見て漁夫はお辭儀をして、そして口を噤んだ。他の人々も帽子を脫いで頭をさげた。

『お前さんたち、どうか遠慮はしないこと、私はこの人の話してゐることを聞かうとして來ましたのぢや』と僧正は言つた。

『この漁夫さんはあの隱者たちのことを話してゐました。』と、皆のうちで一番氣の強いらしい商人が答へた。

『どの隱者たちです?』と僧正は訊ねながら舷側へ歩み寄つて、とある箱に腰を卸して、『その隱者のことを話して下さい。どうか伺ひたいもので。お前さん方は何を指差して居りましたかな?』

『へえ、それあそこに見えます、あの小さな島です。』と、先の男は少し右寄りの前方にある一小點を指差しつゝ答へた。『あの島がつまり靈の救濟の爲に隱者達が住んでゐる處でございます。』

『何處へ島がありますか?私には何にも見えない。』と僧正は言つた。

『ずつと向ふです、それ、私の指差す方を御覽なさいませ。ちよいと雲が見えませう?その下に、そして一寸左寄りに、ほんの微かな條がございませう。あれが其の島なんでございます。』

僧正は注意深く眺めた、けれど慣れない彼の眼は日光を受けてチラ〳〵と光る水の外何にも見付け得なかつた。

『どうも私には見えない。ですが、あそこに住んでゐる隱者達とは一體どんな人です。』と僧正は言つた。

『あの人達は聖者でございます。』と漁夫が答へた。『私は永年あの人達のことを話に聞いて居りましたが自分では一昨年までつひ見る機會がありませなんだ。』

そして漁夫は、漁に出て漂流し、何處とも分らずに其島に夜間舟を乘り上げた折のことを物語つた。夜が明けてから其の島をさまよつてゐると、一軒の土作りの小家に行き着いて、その近くに立つてゐた一人の老人に出遇つた。間もなくまた二人の老人が現はれた。そして彼に食物を與へ、着物を乾かさした後で、その三人の老人は彼の舟の修繕をも手傳つてくれた。

『して其の人達はどんな風に見えたのだえ。』と僧正は訊ねた。

『一人は小柄で背が曲つてゐます。この人は長い法衣を着てゐて、大變な年寄で、きつと百より上でござんせうかね。そりやもう其の白い髭が青味を帶びて來たくらゐ大變な年齢ですが、いつもニコ〳〵してその顏は天から降つた天使樣のやうに晴々してをります。二番目の人は背は少し高いが、やつぱり大層の年寄りで、ボロ〳〵になつた百姓の着物を着てをります。その髭は濃くて、黃ばんだ灰色をして居ります。この人は非常な强力で、私が手傳はないうちに、一人で手桶でも扱ふやうに私の小舟を引繰返しました。おまけになか〳〵親切で氣のさくい人です。三番目の老人も背が一番高く、髭は雪のやうに眞白く膝まで屆きます。これは眉毛の垂懸つた嶮相な人で、何にも着ないで唯腰の圍りに莫蓙を卷き附けてをります。』

『して其の人達はお前に口をきいたのかい?』と僧正は訊ねた。

『大抵は何をするにも默つてゐました、仲間同志でも滅多に話をしませなんだ。一人が目くばせをすると、他の人達はその意味を覺りました。私は一番背の高い人に、此處に長く住んでゐますかと訊ねましたら、その人は顏をしかめて怒つた樣に何かブツ〳〵言ひました。けれど一番年寄りの人がその手を取つてにこ〳〵しますと、おだやかになりました。そして一番年寄りの人が、「私等を可哀さうと思つておくれ。」と言つてにつこりしました。』

漁夫がかう話してゐる間に船は其の島に段々近づいた。

『僧正樣、御覽なさいませ、もう島がはつきり見えて參りました。』と、商人は指差しつゝ言つた。

僧正は見た。もう本當に黑い一線が——つまり島が見えた。彼はしばらく之を眺めた後に、船首を去つて船尾へ行き、舵手にかう訊ねた。

『あれは何といふ島です?』

『あの島は、名がございません、名の無い島はこの海には澤山ございます。』と舵手は答へた。

『あの島に、靈の救濟の爲に住む隱者がゐるとは本當かいの?』

『左樣申し傳へてをります、貴方樣。ですが私はそれが眞實かどうか存じません。漁夫どもは隱者を見たと申します、が、大方いゝ加減なお話しでございませう。』

『私はあの島へ上陸して其の人達に會ひたいのだが、何とかしてさう出來ないものらだうか？』と僧正は言つた。

『この船はあの島にや着けることが出來ません。けれど小舟でなら漕ぎよせることが出來ませう。何れにしても船長にお話しになつた方が宜しうございます。』と舵手は答へた。

船長は迎へを受けてやつて來た。

『私はあそこの隱者たちに會ひたいのだが、上陸するやうに出來ますまいか？』と僧正は言つた。

船長は僧正を思ひ止らせやうとして、かう言つた。

『勿論出來は致しますが、しかし大分時間がかゝります。それに御前にかう申しては憚り樣ですが、その老人達は貴方樣を煩はせ申すほどの價値がございません。私の聞きましたところでは、その老人達は馬鹿げた人々で、何にも解らず、また海の魚同樣少しも口をきゝませんさうです。』

『私は會つて見たいのぢや。でお前さんがたの骨折や隙潰しの料は拂ひませう。どうか小舟の用意をして下さい』と僧正は言つた。

これを否むわけにも行かないので、その命令を下した。水夫等は帆を引直し、舵手は舵を控へた、そして船はその島へと進路を轉じた。僧正の爲に一脚の椅子は船首に据ゑられた、彼はそれに掛けて前方を見守つた。乘客等は悉く船首に集まつて島を見詰めた。眼の鋭い人々は間もなく島の上の岩石

を見分けることが出來、次で土作りの小家が見えた。遂に或一人が隱者達の姿を見とめた。船長は望遠鏡を持つて來て、自分で眺めてから、それを僧正に渡した。

『全く本當だ。海邊に三人の人が立つてゐる。あれ、あの大きい岩石の少し右手に。』

僧正は望遠鏡を取つて、適宜の位置に置いて、そして三人が……背の高いのと少し低いのとずつと低くて曲つてゐるのとが、手を繋ぎ合つて濱邊に立つてゐるのを見とめた。

船長は僧正に向き直つて、

『貴方樣、船はこれ以上岸に近よれません。若し御上り遊ばすなら、どうか小舟へお移りを願ひたうございます、船は此處に碇を卸しますので。』

碇索は早速繰り出され、碇は投込まれ、帆はおろされた。一つ急反動が來て船は搖れた。やがて小舟はおろされ、漕手等はそれに飛び移つた、そして僧正は梯子を傳つて下りて小舟に座を占めた。漕手等が櫓を取ると、小舟は快く島の方へ走つた。投石の距離まで來ると三人の老人がよく見えた……つまり一番背の高いのは腰に莫蓙を卷いてゐるばかりで、次に背の低いのはボロ〳〵の百姓の着物を着てゐ、そして非常な高齡で腰の曲つたのは古い長法衣を着けてゐた。三人は手をつないでゐた。

漕手等は小舟を岸に漕ぎ着けて、鉤竿で舟を抑へて僧正を上陸せしめた。

老人等は僧正に對して身を屈めた。僧正は祝禱を與へた。と、三人はます〳〵身を低くかがめた。

やがて僧正は話しかけた。

『信心深い方々、私は貴方がたが自己の魂の救濟の爲に、また同胞人數のため主基督に祈る爲に此處に住んでゐられると聞きました。私は神の僕として價値のない者ながら神の御惠により召されて主の羊を守り且つは敎へて居ります。私は神の僕たちたる貴方がたにお目にかゝつて、やはり貴方がたに何か敎へ得ることがあらばさう致さうと思ひました。』

老人達はにこ〳〵して互ひに顏を見合せたが矢張り默つてゐた。

『貴方がたは靈の救ひのためにどんなことをしてゐられませうか。また此の島でどんな風にして神に仕へておいでゞせうか？』と僧正は訊ねた。

三番目の隱者は太息をついた。そして一番高齡の隱者を見た。後者は微笑をして、かう言つた。

『私等はどんな風に神樣へ仕へるかを知りません。神の御僕、私等はただ神に仕へて辛抱をして居ります。』

『しかし神へどんな風にお祈りです？』と僧正は訊ねた。

『私等はかう祈ります。』と老隱者は答へた。『神樣は三體、私等は三人、私等を憐んで下さい。』

そして老人がかう言つたとき三人とも眼を天に向けて唱へた。

『神樣は三體、私等は三人、私等を憐れんで下さい。』

僧正は微笑した。

『貴方がたは正しく聖三位一體に就て多少御存じと見えますね。けれど貴方がたの祈りは正しくありません。信心深い方々、私は貴方がたが全く好きになりました。主を喜ばさうとの御志は分りません。けれど、主に仕へる方法を御存じありません。そんな風に祈るのではありません。お聽きなさい。私が敎へませう。私のお敎へするのは、私の自己流でなく、神樣が聖典の中でかう祈れよと萬民に御命令になつた其の祈方なのです。』と僧正は言つた。

そして僧正は神御自身が人間に啓示し給うた來歷を說明し出して、父なる神、子なる神、聖靈の神のことを話した。

『子なる神は人類を救ふ爲に地上へ下られました。そして我々萬民にお敎へになつた祈方はかうなんです。よくお聽きなさい。そして私にお從けなさい……「我等の父」。』

と、第一の隱者は『我等の父。』とつけた。次で第二の隱者が『我等の父。』と言つた。次で第三の隱者が『我等の父。』と言つた。

『そは天に在ます。』と僧正は續けた。

『そは天に在ます。』と隱者はつけた。しかし第二の隱者は言葉を間違へた。そして一番背の高い隱者はその通り言ふことが出來なかつた。その髮の毛が延びて口まで生被さつてゐるので發音がはつき

りしなかつた。一番高齢の方も齒がないので不明瞭にモグ〳〵言つた。

僧正はこの言葉を再び繰返した。そして老人等は繰返してつけた。僧正は岩に腰をおろし、老人等はその前に立つて、その口端を見守りつゝ、この言葉をつけて言ふのだつた。一つの言葉を二十度も三十度も、百度も繰返へし〳〵して僧正は一日中骨折つた。そして老人等はそれをつけて繰返へした。

老人等が間違へると、僧正はこれを正した。そして初めから復たやり直した。

僧正は老人等が主の祈りの全體を單に自分の後につけて言ひ得るのみならず彼等自身で言ひ得るまでに敎へ終らないうちは此處を去らなかつた。眞中の老人が眞先に覺えて、自分獨りで主の祈り全體を繰返へすやうになつた。僧正は幾度も〳〵それを繰返へして言はせた。と遂にあとの二人も言ひ得るやうになつた。

もう暗くなりかゝつて、月が海の上に現はれてから、僧正は漸く本船に歸らうと起上つた。訣別のとき、老人たちは地面にとゞくまで身を屈めて彼にお辭儀をした。彼は老人たちを扶け起して、一人〻〻に接吻を與へて、自分が敎へた通りに祈るやうに言つた。そして彼は小舟に乘込み本船へ向つた。

僧正は小舟で本船へ漕ぎ行く間、主の祈りを聲高く繰返す隱者達の三つの聲を聞くことが出來た。小舟が本船に近寄ると、もう其の聲は聞えなかつたが、しかし別れた折のまゝ一番背の低いのを中に、一番背の高いのを右に中背のを左にして濱邊に立つてゐるのを月の明りで見ることが出來た。僧正が

本船に乘移るや否や碇は引揚げられ、帆は張られた。帆は風を一杯にふくんで、船は走り出した。僧正は船尾に腰をおろして、別れて來た島を見守つた。しばらくは隱者達をまだ見ることが出來たが、その內に見えなくなつた。それでも島はまだ見えた。遂にそれも見えなくなり、あとは唯月の明りに連打つ海だけが見えた。

巡禮等は眠りにつき、甲板上はすつかり靜まつた。僧正は眠りたくないので、唯一人船尾に腰掛けて、最早見えなくなつた島の方の海に眺め入り、善良な老人たちのことを考へてゐた。老人たちは主の祈りを敎はつてどんなにか喜んだらうと彼は考へた。そして斯樣な信心深い老人達を敎へ導びく爲に自分を遣はし給うた神に感謝した。

かうして僧正は島の見えずなつた海を見詰めて考へつゝ坐つてゐた。月光は波の上にあちらこちらと、きら〳〵輝いて彼の眼を射た。突然、海の上に投げられた邪かしい一道の月光の彼方に白く光る或物が見えた。それは海鷗であつたか、それとも小舟の閃めく帆影であつたか？僧正は不思議に思つてそれを見詰めた。

『あれは後方から帆走つて來る小舟に違ひない。』と彼は考へた。『しかしなか〳〵速く追付てくる。ほんの今までは遙か彼方にあつたのに、もうそこへ來た。小舟であらうわけがない。帆が見えないもの。しかし何にしても此の船を追ひかけて、追付かうとしてゐるらしい。』

彼はどうしてもその何であるかを判じかねた。小舟でも、鳥でも、魚でもない。人間にしては大き過ぎるし、また人間がそんな海の眞中を歩き得る筈がない。僧正は立上つて舵手に言つた。

『お前さん、あれを御覽、あれは何だらう？あれは何だらう？』と僧正は繰返した。尤も彼はもう其の何であるかを明かに認めることが出來た。それは彼の三人の隱者が皆な白く光つて、白い髯も輝いて海の上を走つてゐるのだつた。そして此方の船は少しも動いてゐないかの樣に速かに近寄つて來るのだつた。

舵手はこれを眺めて、恟つとして舵を手放した。

『おやつ！あの隱者たちは乾いた陸のやうに海の上を走つて追掛けてくる！』

船客はこの聲を聞いて、飛んで來て、船尾に螺集つた。隱者たちは三人手を繋いで、兩側の二人が船に止まれと手招きしつゝやつて來るのが見えた。三人とも足を動かさないで、水の上を滑つてゐた。船が止まらないうちに隱者たちは船に着いて、三人同音で言ひ出した。

『神の御僕、私等は貴方の敎へを忘れました。あれを唱へてゐた間は憶えてゐましたのぢやが、一寸の間止めたら一語を打忘れました。今はもう全體が目茶々々になりました。私等はあれを些とも思ひ出すことが出來ません。も一度敎へて下さい。』

僧正は十字を切つた。そして舵側へ身を曲げて、かう言つた。

『信心深い方々、貴方がた御自身の祈りは神樣へ達しませう。貴方がたを敎へるのは私の柄にないことです。私等罪人のために祈つて下さい。』

さうして僧正は老人たちの前に低く身を屈めた。彼等は向き直つて、海の上を歸つて行つた。そして彼等が見えなくなつた地點には夜の明けるまで一つの光が輝いてゐた。

悔改むる罪人

イエスに言ひけるは、主よ爾の國に來らん時我を記憶し給へ。イエス彼に告げて言へり、我誠に爾に言ふ、爾は今より我と共に天國に在らん。（路加傳二十三章四十二、四十三節）

昔一人の人が七十年世に生きてゐた、が、其人は罪の一生を送つた人であつた。それから此人は病氣になつた。併し悔改めなかつた——唯愈々最後に死が迫つて來た時に、彼は泣いて叫んだ。『おゝ主よ、十字架の上の盗賊を許し給ひしやうに我を許し給へ。』それ丈けが彼の靈魂がまだ肉體を離れぬ中に彼の言へた言葉であつた。併し其の罪人の靈魂は神を愛して、其の御慈悲を願つた。斯ういふ風で其靈魂は樂園の入口まで來た。

そこで罪人は戸を敲いて、天國へ入れて貰い度いと歎願し出した。すると戸の中から斯ういふ聲が彼に聞えた。『樂園の戸を敲く此の人は如何なる行ひの人か、如何なる行爲を生涯になした人か？』

すると詰責者の聲がそれに答へて、其人の罪の行爲を悉さに述べ立てた。そして善い行爲は一つも言はなかつた。

それから戸の中の聲が復言つた。『罪人は天國に入ることは出來ぬ。此處より立去れ。』

そこで其人は叫んで言つた。『おゝ審判者よ、あなたのお聲は聞えますが、お顏は見えませぬ。またあなたの御名も私は知りませぬ。』

さうするとその聲が答へた。『使徒ペテロぢや。』

そこで罪人は言つた。『私をお憐み下さい。使徒ペテロ樣。そして人間の弱きものなることゝ神の御慈悲とをお思ひ起し下さい。あなたは基督の御弟子ではありませぬか、あなたは主御自身の唇から教をお聞きなされたのではありませぬか、又主の生涯にお示しなされた事を御覽になつたのではありませぬか？あなたは又主が靈の惱みの中に居られてあなたに三度、何故汝は眠りて祈らざるやとお聞きなされた時、あなたはあなたの眼が疲れてゐた爲めに眠つて了はれ、三度主はあなたの眠つて居るのを見られた其時のことを覺えて居られませぬか？』

『あなたは又主に自分は死ぬる迄主を知らずと言はぬと誓はれ、然も主が祭司の長カヤパの所へ連れて行かれた時あなたは三度彼を知らずと言はれたのを覺えて居られぬのですか。私もその通りであつたのです。』

『あなたは亦鷄が鳴いたので出て行かれて悲しく哭いたことを覺えて居られませぬか？私もその通りであつたのです。あなたは私に樂園に入ることを否むことは出來ませぬ。』

併し樂園の戸の中からは聲が聞えなかつた。

少時待つて居たが、罪人は復天國に入ることを許して貰ひたいと歎願し始めた。すると第二の聲が戸の中から聞えた。『この人は誰か？下界で如何なにして生きてゐた者か？』

詰責者の聲が答へて、再び其罪人の惡い行爲を悉く繰返し述べた。そして善い行爲は一つも述べなかつた。

すると戸の中からの聲が答へた。『此處より立去れ。汝のやうな罪人は樂園に共に居ることは出來ぬ。』

併し其罪人は叫んで言つた。『審判者よ、あなたの聲は聞えますが、お顏は見えませぬ。又あなたの御名も私は知りませぬ。』

其時其の聲は彼に言つた。『俺は豫言者ダビデ王だ。』併し罪人はそれ限り止めもせず、戸の傍を立去らうともしなかつた。そして再び叫んだ。

『私をお憐み下さい。ダビデ王樣、そして人間の弱い者だといふことゝ神樣の御慈悲とをお思ひ起し下さい。神樣はあなたを愛し、あなたをあなたの一族の上に立てられました。あなたはあらゆるものを持つて居られます——國も、名譽も、富も、多くの妻も、多くのお子も持つて居られます——けれどもあなたは御自分の家の屋根から貧しい者の妻を見て、罪があなたの御身に宿りました。あなたはウリヤの妻を奪つて、アンモンの人々の劍でウリヤを殺しました。あなたは富者であり乍ら貧しい

者の持つてゐた一匹の牝羊を奪つて、其男を殺されました。私やその通りであつたのです。』

『併しあなたは御自分から悔改めて、「われは我罪を知る。我罪は常に我が前に在り。」と言はれたことを覺えて居られませぬか。私の今がその通りでございます。あなたは私に樂園に入ることを否むことは出來ませぬ。』

併し樂園の扉の中からは聲が聞えなかつた。

少時待つてゐたが、罪人は戸を敲いて復天國に入ることを許して貰ひたいと歎願し始めた。

すると第三の聲が戸の中から聞えた。『この人は誰か？下界でどんなにして生きてゐた者か？』

詰責者の聲が答へて、三度目に更に此人の惡い行爲を繰返し述べた。そして善い行爲は一つも述べなかつた。

『其處より立去れ。』とその聲は言つた。『罪人は天國に入ることは出來ぬ。』

併し其罪人は叫んで言つた。『審判者、あなたの聲は聞えますが、お顏は見えませぬ。又あなたの御名も私は知りませぬ。』

すると其聲は答へた。『ヨハネぢや。イエスの愛された弟子ぢや。』

そこで罪人は喜んで言つた。『今あなたは私の樂園に入ることを否むことは出來ませぬ。ペテロ樣とダビデ樣は人間の弱いものだといふことゝ神樣の御慈悲とを知つておゐでになるのに、私を入れて下

さいませんでした。併しあなたは私を入れて下さるでせう。あなたの中には溢れるばかりの愛があるのですから。ヨハネ樣、あなたはあなたの書物の中に、神は愛なり。愛せざる者は神を知らずとお書きになつたのではありませぬか。あなたは年寄られてから人々に――「兄弟よ、互に愛せよ。」と言ふ教を與へられたではありませぬか？それならばごうしてあなたは私を惡み私を此處から追出すことが出來ませう？あなたは私を愛し私に天國に入る許を與へなければなりませぬ。それでなければあなたは御自分の言はれたことを打消さなければなりませぬ。』

すると樂園の戸が開かれた。そしてヨハネはこの悔改めた罪人を許し、彼を天國に入れてやつた。

（完）

空の太鼓の話

エメリヤンは作男で主人のために働いてゐた。或日、仕事に行かうと草原を通つてゐると、一疋の蛙が丁度足許に飛び込んで來たので、危く踏みつけようとしたが、辛つとのことで身體を交はした。

突然、誰かゞ背後から呼びかける聲がした。

振り返ると、可愛らしい小娘がゐて、それが話しかけた。『エメリヤンさん、何故お前さんはお嫁を貰はないの？』

『どうしてお前、私に嫁が貰へよう？私はこの通りの着のみ着のまゝで、別に何にも持たんので、誰も來てくれよう譯がないさ。』と彼は言つた。

『私をお嫁にしておくんなさい。』と娘は言つた。

エメリヤンは此の娘を好いた。『そりや私は嬉しいがね、けれど私等は何處に如何して暮されるんぢや？』と言つた。

『何故そんな心配をするの？人は餘計に働いて少く眠れば、何處でゞも自分の着物や食物は出來る

のよ。』と娘は言つた。

『ぢや、よし、一緒にならうかい。』とエメリヤンは言つた。『二人で何處へ行かう?』

『町へ行きませう。』

そこでエメリヤンと娘とは町へ行つた。そして娘は町のずつと端にある小さな小屋へ彼を連れて行つて、其處で二人は結婚をした。新世帶を始めた。

或日、國王樣が馬車で町をあるいてゐるとき、エメリヤンの小屋の前を通つた。エメリヤンの女房は王樣を見ようと出て來た。王樣は彼女に目をとめて、すつかり驚いた。

『こんな美人が何處から來たのだ?』と言つて、王樣は馬車を止めて、エメリヤンの女房を呼寄せて訊ねた。『お前は誰ぢや?』

『百姓エメリヤンの家内でございます。』と彼女は答へた。

『そんな美人でありながら何故百姓と結婚したのぢや?妃にしても恥しくないぞ!』と王樣が言つた。

『御親切なお言葉は有難うございます。ですけれど私は百姓の良人で十分結構でございます。』と彼女は言つた。

王樣は一寸の間彼女と話してから馬車を進めた。王樣は宮殿に歸つても、エメリヤンの女房をどう

しても忘れることが出來なかつた。その夜はまんじりともしないで、彼女をどうして自分のものとしようかと考へ續けた。どうしても其の方法が考へつかないので王樣は家來どもを呼んで、何とか手段を巡らせよと言ひつけた。

家來どもは言つた。『エメリヤンに宮殿へ來て働けと御命令なさいませ。さう致せば私たちは彼奴が死ぬるやうに烈しくこき使ひます。さうなると彼の女房は寡婦さんになりますから、その上で貴方樣のものとなさいませ。』

王樣はこの勸めに從つた。エメリヤンには人夫として宮殿に來て働くやう、又女房と共に宮殿に住居をするやう命令が出た。

使者はエメリヤンの許へ來て國王の命令を傳へた。女房は言つた。『エメリヤン、お出でよ、そして一日中お稼ぎよ、けれど夜は家へ歸つておいでなさい。』

で、エメリヤンは行つた。彼が宮殿に着くと、王樣の執事はかう訊ねた。『何故お前は女房をつれずに一人で來たのか?』

『何であれを引張つて參りませう?あれにや住む家がございますもの。』と彼は答へた。

宮殿ではエメリヤンに對し優に二日分の仕事を當てがつた。彼は片付けてしまふ氣なしに其の仕事を始めた。が、夕方になると、まあそれがすッかり出來上つてしまつた。執事はその仕事の出來上つ

たのを見て、翌日分にはその四倍もあてがつた。

エメリヤンが家へ戻ると、あたりは綺麗に掃除が出來て、竈には火が入つてゐ、夕飯の仕度もちやんと出來てゐた。そして女房は食卓の側に坐つて縫物をしながら彼の歸りを待つてゐた。女房は挨拶をして食卓を展き、食物と飲物をすゝめた後、今日の仕事に就て訊ねた。

『あゝ！惡い仕事ぢや。私に出來んほどの仕事をあてがつてさ、さうして私を使ひ殺さうとしよるんぢや。』と彼は言つた。

『その仕事を怒るんでないのよ。』と女房は言つた。『仕事がどれだけ出來たか、どれだけ殘つてゐるかなどと前や後を見廻らないがいいわ、たゞ働いてゐればすつかり旨く行くのよ。』

そこでエメリヤンは眠りに就き、翌朝はまた働きに行つた。一度もあたりを見廻さないで働いた。と、驚いたことには、夕方までにはすつかり濟んでしまつた。そして暗くならない内に家へ戻つた。

幾度も〳〵エメリヤンの仕事の量は殖されて行つたが、彼は常に早目に濟まして自分の家へ寢に歸るのだつた。一週間は經つた。王樣の家來どもは烈しい仕事では此の男を使ひ殺すことが出來ないと見て取り、今度は技術の要る仕事をあてがつて見た。しかしこれも矢張り無効であつた。大工の仕事でも、左官の仕事でも、屋根仕事でも、何でも當てがつたものは、ちやんと間に合ふやうに濟まして、夜は家へ戻るのだつた。かうして第二週間は暮れた。

そこで國王は家來どもを呼んで言つた。『私はお前等を遊ばして養はねばならぬのか？二週間は早や經つたが、お前等がなし遂げたことは何もないのだ。お前等はエメリヤンを仕事で參らさうとやつてゐたが、私はあの男が毎夕愉快に歌を唄うて自宅へ歸るのを窓越しに見たのぢや。お前等は私を馬鹿にする積りなのか？』

家來どもは辯解を始めた。『私達はあの男を烈しい仕事で使ひ殺さうと致しましたが、どんな烈しいことでも彼には無駄でした。箒で掃いたやうにすつかり片付けてしまふのです。彼は何をしても疲れません。それで私達は技倆を要する仕事なら、とても彼には出來まいと思ひまして、それをやらして見ましたが、矢張りすつかり片付けました。彼に當てがつた仕事は、どうしてやるのか知りませんが、殘らず仕遂げます。あの男かあれの女房かゞ助けになる魔術を心得てゐるに相違ございません。私達もはや彼が嫌になりました。で、彼の手におへない仕事を見付けたいのです。私達は彼に唯一日で大伽藍を建てさせやうと目論でをりますから、どうかあの男をお呼出しになりまして、唯一日で此の宮殿の前に大伽藍を建てよと御命令を下されますやう。その際、彼がそれを致しませんでしたら、命令違反として斬首になさいませ。』

國王はエメリヤンを呼出した。

『ようく私の命令を聽かうぞ。』と王は言つた。『この宮殿の前の廣場に新しく大伽藍を建立せい。し

てそれは明夕までに落成させるのぢや。若しそれを遣り遂げたら褒美をつかはさう。しかし若し出來なかつたらお前の首を打落さうぞ。』

エメリヤンは王の命令を聞いて、御前を退いて、家へ歸りながら『おれの終りも近づいた。』と考へた。歸つてから女房にかう言つた。『おい、用意をせい。私等あ此處を逃げるんぢや。でないと私は自分の罪科からでもないのに殺されるんぢや。』

『何をそんなに恐がつてゐるの？してまた何故逃げ出さねばならないの？』と彼女は言つた。

『どうして恐がらずにゐられう。王樣は私に明日たつた一日で大伽藍を建てろと言ひ付けなさつたんぢや。若し私が出來なんだら此の首が飛ぶ。もうたつた一道あるばかり、まだ時のあるうちに逃げるんぢや。』

しかし女房はそれを聞かないで言つた。

『王樣は澤山の兵隊を持つてござるから、私等が何處へ逃げようと捕まりませう。私等はとてもあの兵隊の手を脱れることは出來ない。だからお前さんの力の續く限り王樣に從ひなさるがいゝのよ。』

『私の力に合はん仕事ぢやのに、どうして從はれるんぢや？』

『まあ、お前さん、さう氣を落すんでないのよ。先づ御飯でも食べてお寢みなさい。明早く起きたら萬事がうまく成つてゐませう。』

そこでエメリヤンは横になつて眠つた。翌朝早く女房が彼を起した。

『早く行つて大伽藍を仕上げなさい。此處に釘や金槌があるわ。まだ〳〵一日の仕事は十分殘つてゐるわ。』

エメリヤンは町へ出て、宮殿の廣場に着いた。と、そこにはまだ仕上らない大きな伽藍が立つてゐた。彼は必要な手入に取りかゝつて、夕方までにすつかり仕上げた。

國王が床を離れて宮殿から外を眺めると大伽藍が見え、そしてエメリヤンは此處其處と釘を打ち廻つてゐた。國王は大伽藍が出來たので機嫌が惡かつた。つまりエメリヤンを死刑に處して其の女房を取ることが出來なくなつたので氣を腐らした。彼は再び家來どもを呼んでかう言つた。『エメリヤンは今度の仕事も矢張り仕遂げたのぢや。で、あの男を死刑に處する口實がない。この仕事でも彼にはひど過ぎなかつたのぢや。お前等はもつと巧みな計畫を發見せい。さもなくば彼同樣にお前等の首をも打落さうぞ。』

そこで家來どもは、宮殿の圍りに河を作つてそれに船を帆走らすやうエメリヤンに命令を下す計畫を立てた。國王は彼を呼出して此の新しい仕事を當てがつた。

『お前は一夜の内に大伽藍を建て得たからには、この仕事も出來よう。明日すつかり仕上げるんだ。若し出來なかつたらお前の首を打落さうぞ。』と王は言つた。

エメリヤンは前の度よりも一層氣落ちして、悲しみながら女房の處へ歸つて行つた。

『何故そんなに消氣てゐるの？王樣がまた新たな仕事をあてがつて？』と女房は言つた。

エメリヤンは一部始終を話してから、『もう逃げなけりやならん。』と言つた。

しかし女房は答へた。『兵隊の手を脫れることは出來やしない。何處へ行つても捕まりますよ。やつぱりその命令に從ふほかはありません。』

『どうして私が出來るものか？』とエメリヤンは呻いた。

『えゝ！　お前さん、まあ氣を落さずにおいでなさいよ。先づ御飯を食べてお寢み。朝早く起きたら、萬事がうまく成つてゐませう。』と彼女は言つた。

それで彼は寢た。朝になると女房は彼を起して言つた。『宮殿へおいでなさいよ、すつから出來上つてゐる。たゞ宮殿の前の埠頭近くに土塚が殘つてゐるから、あれを鍬で掻除けて平せばいゝの。』

國王は目が覺めて見ると、これまでなかつた河が出來て、右に左に船が帆走つてゐ、エメリヤンは鍬で土塚を平してゐた。國王は驚いた。けれどその河をも船をも喜ばなかつた、それほど迄もエメリヤンを死刑に處せられない爲に心痛したのである。『あの男の手におへない仕事は何にもない。どうしたらよからう？』と思つた。で、家來どもを呼んで再び彼等の意見を求めた。

『エメリヤンの手におへない仕事を見付けい。私等の目論んだことは何でも彼奴やり遂げるので、あ

れの女房を取ることが出來んではないか。』と王は言つた。

家來どもは考へに考へた、そして遂に一つの計畫を作出して王の前へ來て、かう言つた。『エメリヤンを呼んでかうお命じなさいませ……「何處とも分らぬ處へ行つて。」『そして「何とも分らぬ物」を持つて來いと。さうしたら彼奴も脫れ得ますまい。彼が何處へ行かうとも、それは本當の場所へ行つたのでないと仰しやることが出來ます、又何を持つて參りませうとも、それは本當の物でないと仰しやることが出來ます。さうして彼の首を刎ねて、あの女房をお取りになることが出來ます。』

王は喜んだ。『それは好い思ひつきぢや。』と言つて、早速エメリヤンを呼出して言ひ渡した。『これ「何處とも分らん處」へ行つて「何とも分らん物」を持つて參れ。若し出來なかつたらお前の首を刎ねるんぢや。』

エメリヤンが家へ歸つて、國王の言つたことを女房に話すと、彼女は考へ込んだ。

『まあ、そりやお前さんを陷さうとて、家來どもが國王樣に敎へたのよ。今度は私たちも用心深くやらなけりやならん。』と彼女は言つた。そして坐りこんで考へた。遂に良人にかう言つた。『お前さん、あの兵隊の阿母さんの百姓婆さんね——あのお婆さんの處まで遙々行つて、助けを借らねばなりませんよ。あのお婆さんが何かお前さんに呉れたら、それを持つて直ぐに宮殿へお出でなさい、私は宮殿に居りませう。私はもうお上の手から脫れることが出來ません。あの人達は私を無理無態に奪ひ

ませう、けれどそれは長いことぢやない。若しお前さんがお婆さんの言ひ付ける通り何も彼もすれば、私を直ぐ救ひ出せます。』

さう言つて女房は亭主に旅の用意をさせ、一つの頭陀袋と一つの紡錘とを與へた。そして、『この紡錘をあのお婆さんへおやり、これを表象にお婆さんはお前さんを私の亭主ぢやと知りませう。』と言つて、その道順を敎へた。

エメリヤンは出發した。彼は町を後にして段々やつて行くと、兵隊たちの調練をしてゐるところへ着いた。エメリヤンは立停つて、見入つた。調練が濟むと兵隊たちは腰をおろして休憩した。で、エメリヤンは彼等のところへ行つて、かう訊ねた。『お前さんたち、「何處とも分らん處へ」はどう行つていゝか、また「何とも分らん物」をどうして手に入れるか、それを知つてゐるかいの?』

兵隊たちは驚いて之を聽いた。そして『この使者にお前さんをやつたのは誰ぢや?』と言つた。

『國王樣ぢや。』と彼は言つた。

『私等自身も兵隊になつた其の日から「何處とも分らん處」へ行くのだよ、けれど根つから其處へ行着かない。また私等も「何とも分らん物」を捜すんぢやが、一向に見付かりやせんのぢや。だからお前さんを助けることは出來ない。』と兵隊たちは言つた。

エメリヤンは兵隊たちと一緒に暫く腰を卸してから復た歩き出した。彼は幾里も〳〵てく〳〵と歩

いた。そして遂にとある森に來た。その森の中には一つの小屋があり、その中には、百姓兵隊の阿母であるお婆さんが芋を績みながら泣いてゐた。お婆さんは績むときに其の指を口の唾で濕さずに、眼の涙でしめすのであつた。お婆さんはエメリヤンを見ると怒鳴つた。『此處へ何しに來たんだ?』そこでエメリヤンは例の紡錘を差出して、これは女房から上げるのです、と言つた。

お婆さんは直ぐに機嫌を直して、彼に尋ね始めた。で、エメリヤンは自分の越し方を……つまりかの小娘と結婚したこと、二人で町に世帶を持つたこと、自分の働きや宮殿でしたこと、大伽藍を建てたり、河を作つて船を浮べたこと、それから國王が自分に對して『何處とも分らん處』へ行つて『何とも分らん物』を持つて來いと命じたこと等を殘らず物語つた。

お婆さんはじつと終りまで聽いて、そして涙を止めた。彼女は『たしかに時が來た』と小聲で獨りごちて、さて言つた。『宜しい、お前さん、まあお掛け、何か食物をあげませうから。』

エメリヤンが食事を濟ますと、お婆さんは彼に爲すべきことを話して、かう言つた。『ここに糸毬がある。これをお前さんの前に轉がして、その行くところへ從いて行くがいゝ。お前さんはずつと海邊へ着くまで行くんですよ。そこまで行けば大きい市がある。その市へ入つて、一番向ふ端の家に一夜の宿を乞ふのだよ。その家でお前さんの尋ねるものを見付ければいゝ。』

『お婆さん、私はそれを見たとき何うしてそれがさうだと分りませうか?』と彼は訊ねた。

『父よりも母よりも餘計に人を從がはせるものを見たら、それがさうなんだ。それを掃まへて、國王の許へ持つて行くのです。國王の許へ持つて行くと、國王はこれは本當のものでないと言ふから、お前は『本當のものでなければこれを打壞しませう。』と答へるのです。そしてそれを打つて、あの河へ持つて行つて、片々に壞して、それを河へ投棄てるがいゝ。さうするとお前の女房は歸つて來るし、私の涙も乾きませう。』

エメリヤンはお婆さんに暇を告げて、例の糸毬を轉がし始めた。糸毬はころ〳〵と何處までも轉がつて遂に海へ達した。海邊には大きな市があり、その市の向ふの出端れには大きい家があつた。エメリヤンが其處へ行つて一夜の宿りを乞ふと許された。彼は眠りに就いた、そして朝になつて目を覺ますと、父が息子に起きて薪を切りに行けよと起してゐる聲が聞えた。しかし息子はそれに從はないで「まだ早過ぎる、時はまだ十分ある」と言つた。やがてエメリヤンは母親の聲を聞いた。『おい、これお出でよ、お父さんは五體が痛むんぢや。お前はお父さんを薪取りにやる氣かい？もう起き時だよ。』

しかし息子は唯ぶつ〳〵何か言つて再び寢込んだ。彼がうと〳〵したかしないうちに街路で仰山な音を立てるものがあつた。息子は跳起きて手早く着物を着て、街路へ飛びだした。エメリヤンも同じく跳起きた。そして父よりも母よりも餘計に息子を從はせた其の物が何であるかを見ようとて、その息子について走つた。彼の眼に映つたものは、胸先に或物を吊し持つて撥で叩きながら街路を歩いて

ゐる一人の男だつた。つまりそれが喧しく鳴り響いたもの、またかの息子を從はせたものであつた。エメリヤンは走つて追付いて、それを見た。それは小さな盥に似た圓いもので、その兩端には皮を張つてあつた。彼はその名前を訊ねた。

『太鼓』との答へを得た。

『して、こりや空ですかい？』

『え〳〵、空だよ。』

エメリヤンは驚いた。彼はそれをお呉れよと賴んだが、どうしても呉れなかつた。そこで彼はもう賴むことを止めて、その太鼓打の後に從いて行つた。一日中ついて行つた。そして遂に太鼓打が眠つたときに、エメリヤンはその太鼓を引奪つて走り去つた。

彼は走りに走つてたう〳〵自分の町に着いた。女房に會はうとて家へ歸つたけれど、彼女はゐなかつた。彼が家を出發した翌日、國王が彼女を伴れて行つたのである。そこでエメリヤンは宮殿へ行つて、王樣へかう案内を乞うた、『「何處とも分らん處」へ行つた者が歸つて參りました、そして「何とも分らん物」を持つて歸りました。』

召使ひどもが之を王樣に言上すると、王樣は明日出直して來いと言はせた。

しかしエメリヤンは言つた。『私は今日こゝに王樣から言ひつかつたものを持つて來てをると申上げ

ておくんなさい。王様に此處へお出でを願ひます、でないと私が入つて參ります。』

王様は出て來て、『お前は何處へ行つて來たのだ？』と言つた。

エメリヤンは言つた處を話した。

『それは本當の場所でない。お前は何を持つて來たのか？』と王様は言つた。

エメリヤンは太鼓を指差した。しかし王様はそれを見向きもしなかつた。

『それはさうでないのだ。』

『若しこれが本當の物でなければ、これを打壞さねばなりません、え、惡魔にやつてしまへ！』

そしてエメリヤンはその太鼓を持つて叩きながら宮殿を立去つた。彼が太鼓を叩くと、王様の兵隊は悉く走り出て彼に從いて來た。そして彼に敬禮して彼の命令を持つのだつた。

王様は窓から聲を張りあげてエメリヤンに從いて行くなと兵士等に命令し始めた。しかし兵士等はその命令には耳を貸さないで、エメリヤンに從がつた。

これを見て王様はエメリヤンの家内を彼に返してやつて、そしてかの太鼓を呉れるやうに申込んだ。

『そりや出來ない。私はこれを打壞して其のかけらを河へ投棄てろと言付けられてゐるんぢや。』とエメリヤンは言つた。

さうしてエメリヤンは太鼓を持つて河へ下つて行つた、兵士等は從いて行つた。彼は河の堤に達すると、其の太鼓を片々に打壞してかけらを流れに投込んだ。すると兵隊は殘らず逃亡した。

エメリヤンは女房を伴れて家へ歸つた。そして其の後國王は彼を虐めなくなつたので、二人はいく久しく幸福に暮した。（完）

虐げられた猶太人のために書かれし話

アッシリア王エサルハッドン

勞働と死と疾病と

三つの疑問

アッシリア王エサルハッドン

アッシリアの王エサルハッドンはレイリー王國を攻め立てゝ町々を荒らしては火を放つた。住民は殘らず自分の國に生捕つてきて、勇士等を殺し、隊長達の首を刎ね、その他の者を或は棧刺しにし、或は生きながらに皮を剝いだ。そして、レイリー王その人を園のなかに投げ込んだ。

或る夜、エサルハッドンは身を床の上に横へながら、どんな仕方でレイリー王を殺してやらうかと考へてゐた。と、その時、床の近くにさら〳〵といふ物音を聞いた。目を開けると、一人の老人が立つてゐた。白髭を長く垂らして、目はやさしげに光つてゐた。

『お前さんは、レイリーを殺さうと思ふのか？』と老人がたづねた。

『いかにも、』と王は答へた。『だが、どうして殺したらいゝか決め兼ねてゐる。』

『だが、お前さんはレイリーだよ。』と老人が言つた。

『そんなことがあるものか。』と王は答へた。

『レイリーはレイリー、俺は俺さ。』

『お前さんとレイリーとは同じ者なのぢや。』と老人は言つた。『お前さんは自分はレイリーでない、そしてレイリーはお前さんでは無いといふ。だが、それはさう思ふだけのことぢや。』

『それはまた何といふ理由なんだ？』と王が言つた。『こゝに俺がゐる。軟かな床に臥ながら。この俺のまはりには幾人かの下僕と下婢とがかしづいてゐる。明日の朝には、俺は俺の友達と美い料理を食ふ、今日さうやつて食つたやうに。だが、レイリーは籠の鳥も同樣に獄屋の中に囚はれてゐる。そして明日の朝には生きながらに皮を剝がれる、舌の先を引つ懸けられて死ぬまでもがく、そして五體は犬共に喰ひ散らされて滅茶々々になつちまうのだ。』

『お前さんは、彼の生命を損なふことは出來んのぢや。』と老人が言つた。

『でも、俺は殺したぢやないか、一萬四千人ほどの勇士等を。それらの死骸は積んで山をなしたのだ。』と王は言つた。『俺は生きてゐるのに、彼等は最早や世に居ない。俺が人の生命を亡ぼすことが出來るのだといふことが之をみても解るぢやないか？』

『もはや彼等がこの世にゐないといふことが、如何してお前さんに解るのぢや。』

『もはや彼等を見ないからだ。それに彼等は責め殺されて死んだのだ、だが、俺はさうでない。彼等

は憂目をみたのだが、俺は運が好かつたのだ。』

『だが、それがぢや、さうお前さんには見えるだけのこと。お前さんは、彼等を苦しめたのぢやなくて、己が身を苦しめたのぢや。』

『俺には判らん。』と王は言つた。

『その理由を知りたいと思ふのか？』

『知りたいものだ。』

『ぢや此處に來るがよい。』と老人が言つた。そして大きな池を指さした。そこには水が一ぱい湛へられてゐた。

王は起き上つて、その池の近くに進んでいつた。

『裸になつて、池のなかに入るのぢや。』

エサルハッドンは老人の言葉どほりに從つた。

『この水をお前さんの頭に注ぎかけたなら、すぐさま。』と老人は、水差に水をたつぷり容れながら言つた。『頭を低げよ。』

老人は手の水差を王の頭上に傾けた。と、王は頭を低げた。やがて頭は水に沈んだ。

王エサルハッドンが水の下に沈むや否や、最早や己れはエサルハッドンではなくて、誰か他の人間

であつたと思つた。全く自分は他の人間であるやうに思はれるのであつた。彼は立派な寢床の上に臥てゐる彼自身を見た。美くしい女がその傍にゐた。これまでに見たことの無い女であつた。けれども、その女は彼の妻であるのが判つた。女は身を起して彼に話しかけた。

『背の君のレイリー様！貴夫は昨日お仕事でお疲れなさいました。それで何時もより長くお眠みなさいました。そのお眠みなさいます間、私は貴夫を見守り申して、起してあげませんでした。ですけれど、皇子達が、今、大殿堂に集つて貴夫をお待ち致してをります。着物を召しなされて、彼等のところにお出で下さいませ。』

そこで、エサルハッドンは——これらの言葉から、身はレイリー王であつたことを知りながら、そしてこの事にちつとも驚かぬばかりか、むしろこれ迄それを知らなかつたのに驚きながら——起き上つて着物を着ると、皇子達が待つてゐる大殿堂に入つていつた。

皇子達は床に頭をつけて、王レイリーに會釋して、それから起き上つた。そして王の言葉がかつてから始めて王座の前に腰をおろした。まづ一番長年の皇子が口を開いた。皇子は、邪惡なる王エサルハッドンの侮辱には最早や勘忍ならぬ。我等は彼等と戰はなければならぬと語つた。けれども、レイリーの意見はそれと違つてゐた。彼は使節を立てゝ王エサルハッドンと議を戰はさせるやうにと呟附けた。すなはち、皇子達の說く言葉には耳を貸さずに、彼等を去らしめた。彼は使節として振舞ふ

に足る目ぼしい人達を名指してから、王エサルハッドンに語るべきところのものは何であるかをよく云ひ聞かせた。

この用向きが終つてしまふと、エサルハッドンは——身はレイリー王であるのを感じながら——野育ちの驢馬を狩りに出掛けて行かうと馬に跨つた。狩獵はうまく行つた。彼は二頭の驢馬を手にかけた。そして歸つてくると友達と共に酒宴を張つて、侍女である娘達の踊を見物した。翌る日、彼は法廷に出ていつた。そこには彼を待つてゐる幾人かの請願人、訴訟人、及び訊問のために引き出された罪人達が集つてゐた。彼は、其處で何時ものやうに、自分の云ふまゝになる幾多の事件を判決した。この用事が終ると、彼は再び馬上に乘つて好きな娯樂の狩獵に出かけた。狩獵はまたも上出來であつた。今度は手づから牝獅子を屠つて、二匹の兒を生捕つた。狩獵がをはると、彼はふたゝび友達と酒宴をひらいて、音樂を奏でさせたり、踊を踊らせたりして悅に入つた。そして愛しの妻と共に一夜を明かした。

かうして、一つは王者の務と、一つは王者の愉樂とに自分の時を送りながら、彼は幾日かまた幾週かを過ごした。そして、その間、彼自身であるところの王エサルハッドンに差し遣はした使節等の歸國するのを待つてゐた。一月は過ぎても使節の者は歸らなかつた。やがて、彼等は鼻と耳とを剃がれたまゝで戻つて來た。

王エサルハッドンは、彼等——使節等に爲したやうな仕打を、レイリー王にも加へるであらう、すなはち彼等と同樣に、王の鼻と耳とを剃ぎ取るだらう、若し早速に金と銀と糸杉樹とを貢物としてレイリー王自ら罷り出て來て、エサルハッドン王に敬意を捧げなかつたならば。と、いふ次第をレイリーに告げよ。と使節等に申し渡したのであつた。

それまではエサルハッドン王であつたレイリーはふたゝび皇子達を召び集めて、如何したらいゝであらうと諮られた。皇子達は、皆一致して、先方から襲つて來るのを待つてゐるに及ばない、こちらから進んでエサルハッドンと戰はうと說いた。王はそれに同意した。そして、自ら軍勢の首將となつて、征途に上つた。七日の間、ぶつ續けに軍を進めていつた。王は日々馬上にあつて、全軍の士氣を鼓舞するために、軍勢のなかを巡つた。八日目になつて、王の軍勢はエサルハッドンの軍勢と、或る河の流れてゐる廣い谷間に於いて相會じた。レイリー王の軍勢は勇敢に戰つてあつた。けれども、レイリーは——これまでエサルハッドンであつたそのレイリーは、蟻の如くも群がりながら山を斷け下つて、まつしぐらに我が軍目蒐けて押し寄せてくる敵を見た。そこで、彼は二輪馬車に乘つたまゝ、自ら戰爭の眞つただ中に飛び込んで、敵の勇士を斬りに斬り、倒しに倒した。けれども、レイリー軍の兵士共は、わづか數百人ばかりとなつた。しかも、エサルハッドン勢はなほ數千人あつた。レイリーは自分が傷ついてゐるのを知つた。彼は捕虜となつた。九日間といふもの、彼は縛り付けられたま

ム、エサルハッドンの兵士共に警固されながら他の捕虜と共に道を歩いていつた。かくて、十日目には、ナインベエフに到着して、彼は獄屋のなかに閉ぢ込められた。レイリーは、飢と傷とに苦しむよりも、むしろ恥と、何等施しやうもない怒とのために苦しんだ。彼の爲し得たものは、ただ一つ、彼の苦悶を見て娯しまうとする敵共に、その滿足を與へてやらないことであつた。彼は、自分に加へる敵の仕打が、どんなものであらうとも、弱音を吐かず、雄々しくも確固とそれに耐へ忍ばうと決心した。

二十日の間、死刑となる日を待たされながら、レイリーは獄屋のなかに座つてゐた。彼は彼の身内の者、友達などの殺されてゆくのを見た。殺されてゆく、人達の呻唸を聞いた或る者は手はそのまゝに脚だけ切られ、また或る者は生きながらに皮を剝がれた。けれども、彼は苦悶の情も悲しみも、また恐怖の情もその顏色に出さなかつた。彼は、愛しの妻が縛られて、二人の黑い姿の宦官に引き立られてゆくのを見た。その妻は、エサルハッドンの奴隷女となつて連れてゆかれるのだといふことを彼は悟つた。しかも、彼は泣かなかつた。けれども彼を看張つてゐる牢番の一人が、彼に對つて、『レイリーよ、可憫さうぢやな！お前は王であつた。それなのに今はどうだ。』と言つた時には、レイリーも流石に、失くしてしまつたすべてのものを想ひ起した。彼は獄屋の門を引つ掴んで、自殺して果てようと思ひ立つた。彼は頭を門に打ちつけた。けれども、彼には最早や打ち當てゝ死んでゆくだけの

力は無かつた。それで、彼はただ失望の呻唸をあげて獄屋の床に倒れた。

つひに二人の死刑執行者がやつて來て、その獄屋の扉をあけると、レイリーの腕を背中に廻して紐でしつかと縛りあげた。彼は執行場に引き立てられて行つた。場内は血潮にまみれてゐた。レイリーは血潮の滴る、尖つた杖を——彼の仲間の一人が刺し貫かれたばかりの杖を見た。そして、それは自分の死刑執行にも使はれるのであるのを知つた。死刑執行者は、レイリーの着物を剝いだ。レイリーは、曾つては逞ましく且つ美しかつた自分の體の今更に痩せ衰へてしまつたのを見て驚いた。二人の執行者は、瘠せ細つたレイリーの股を掴んで持ちあげた。今や、彼を杖に刺さうとするのであつた。

『これが死だ、破滅だ！』と、思つてレイリーは、斷末魔の際にあたつて、雄々しくも沈着を保たうと覺悟してゐたその決心を忘れてしまつた。そして咽び泣きながら憐憫を乞ふた。けれども、誰一人として取りあげる者は無かつた。

『だが、まて、斯うあらう筈がない。』と、彼は考へた。『確かに俺は眠つてゐるんだ、これは夢だ。』そこで、彼は我れと我が身を醒まさうと力一ぱい力んでみた。そして眼覺めてみると、いかにも身はエサルハッドンではなくて、しかも又レイリーでもなくて、或る一種の動物に過ぎなかつた。彼は自分が動物であるのに氣付いて驚いた。そして又、これ迄それを知らずにゐたのに驚かされた。

彼は柔かな草の葉を嚙みながら、また長い尻尾で群がる蠅を追ひ立てながら谷間の方を見つめてゐ

た。彼をめぐつて、一頭の足長な、暗灰色の驢馬の仔が、その背を擦りつけながらふざけてゐた。が、その驢馬の仔は後肢を蹴り立てながら一目散にエサルハッドンの方に駈け寄つて來た。そして滑つこい小さな口を衝き付けて、エサルハッドンの腹の下に潜り込むと、乳房を探したが、探し當てると、しづかにそれを銜へたまゝ、いつものやうに飲みつづけた。エサルハッドンは自分は親驢馬、その仔の母親であることに氣が付いた。けれども、それを知つたからとて、彼は驚かされもしなかつたし、悲しいことにも思はなかつた。むしろ喜ばしい思ひであつた。彼ひとりの生活の喜ばしさと同樣に、その仔の生活の樂しさをも共に味ふやうな思ひであつた。

けれども、不意に何ものかが、微かな唸りを立てゝ近くに飛んで來たとおもふまに、彼の横腹に當つた、と、鋭いその尖端が皮と肉とにぶつゝり刺さゝつた。燒かれるやうな痛みを感じながら、エサルハッドンは——彼は同時に驢馬であつた——突然乳房をもぎ取つたので、仔の齒のために痛められたが、それほど急に、そして耳を後に臥せながら、全速力で仲間の群のゐる方へと駈けた。その群から、彼はひとり離れてゐたのであつた。驢馬の仔は、親に遲れず側に並んで駈けつづけた。二頭とも、遙か離れてゐた仲間の群に追ひ着いたと思ふ時、早くも一つの矢が飛んで來て、仔の首に突き刺さつた。矢は皮を破り肉を裂いたので、仔馬は痛々しげに泣き立てゝ膝を折つてどたりと倒れた。エサルハッドンは、その仔を放つては置けなかつたので、彼はその子を下にしたまゝ立つてゐた。子馬は一

度起き上つて、その細長い脚をよろ〳〵させたが、ふたゝび倒れた。まもなく、一人の恐ろしい二足獣——人間——が馳せ寄つて來て子馬の咽喉を打ち落した。

『かうあらう筈がない、まだこれは夢である。』と、エサルハッドンは考へた。そして、夢から醒めようと氣を振り起した。『確かに俺はレイリーぢやない、驢馬ぢやない。エサルハッドンなんだ。』

彼は叫んだ。叫ぶと同時に頭をあげた……と傍に例の老人が立つてゐた。老人は手に持つてゐる水差の、もうこれしか無いといふ其のお終ひの水を彼の頭に振りかけてゐた。

『おゝ、何んと俺は怖ろしい目に遇つたのだ！何んといふ長い間！』とエサルハッドンが言つた。

『長かつたか？』と老人が答へた。『いま暫らく水の下にお前さんの頭を低げてゐるがよい。それが濟んだらあげるがよい。これ御覽、水差の水はまだすつかり干されてゐないから。でも、判つたかな。』

エサルハッドンは答へなかつた。無言のまゝじつと老人をみつめてゐた。

『いまは判つたであらうが喃。』と老人は言葉をつづけた。『レイリーはお前さんだといふことが……お前さんが殺さうとしてゐるあの勇士達は、やつぱりお前さんであるといふことが……判つたらうな？して、あの勇士達ばかりぢやなく、お前さんが狩獵に出て、殺して來ては酒宴の料に供したあの獣もやつぱりお前さんぢや。お前さんは、魂がひとり自分の裡にのみあるものと思つてゐた。俺はその妄想の覆を拂つてやつた。そして、お前さんが他人に害を加へると、やつぱり自分にも害を加へる

のだといふことを示してやつた。魂は、生命は、それぞれ皆んなにあるが、しかし一つものなのぢや。お前さんの生命は、この一つ生命の或る分け前に過ぎんのぢや。しかも、自分のものであるその分け前の生命だけ、お前さんは、一層よいものとすることも出來るし、また悪いものとすることも出來る——その生命を延ばすことも出來れば、縮めることも出來るのぢや。お前さんは、自分の生命を他人の生命から背くやうに、そして離れたものにしてしまふところの、其の障碍を打ち壊してこそ、始めて自分の裡に持つ生命の改善を計ることが出來るのぢや。他人を自分自身のやうに考へて、それ等の人を愛してこそ始めて自分の生命を立派なものとすることが出來るのぢや。さうやつてこそ、お前さんは、分け前である自分の生命を延ばすことが出來るのぢや。お前さんは、自分だけのものとして其の生命を思ふ時、そして他人の生命を亡ぼして只己が身の幸福を増さうと企てる時、自分の生命を損ふのぢや。さうやれば、お前さんは、自分の生命を縮めるまでぢや。他人の生命を害することは、お前さんには以つての外のことなのぢや。お前さんが殺してしまつた人達はみんなお前さんの目からは消えてしまつた。けれども、その人達の生命は害はれてゐない。お前さんは、自分の生命を長くして、他人の生命を縮めようと考へた。けれども、お前さんの力では、さうすることは出來んのぢや。およそ生命は時間もまた空間も知らないものぢや。一瞬間の生命、また一千年の生命、お前さんの生命さては此の世に於ける形あるもの、或は形ないもの〻一切の生命は、すべて同じものなのぢや。生命を

害ふこと、或はそれを變ずること、それは決して出來ることぢやない。何となれば、生命は存在する唯一のもの、してそれ以外のものは何んなものでも、唯あるかのやうに人には見えるだけなのぢや。』

斯う云ひをはつて、老人はふつ〻り消えて行つた。

次の朝、王のエサルハッドンは、レイリー及び囚人といふ囚人は皆な殘らず自由な身にしてやれ、そして死刑を廢せよ、といふ達示を傳へた。

三日目には、王エサルハッドンは子息のアッシュア・バニ・パールを召んで、王國を其の子の手に讓り渡してしまふと、彼自身は、自分が教へ訓されたところのことを一切考へてみるために曠野に行つた。やがて、彼は町々を、また村々をさまよつてゆく人となつた。そして、あらゆる生命は一つものであること、並びに人間が人を害しようと企てる時には、實に自分自身を害するのであるといふことを人々に說き論すのであつた。

勞働と疾病と死と

これは南アメリカの印度人の間に傳はつてゐる昔噺である。

彼等は云つてゐる。神ははじめ、人間を何一つ働かずともよいやうに造りなされた。それ等の人は家も要らねば、着物もまた食物も要らなかつた。造られた人は殘らず生きてゐて、百人となつたけれども彼等は病氣といふものを知らなかつた。

暫くしてから、神は、人間共がどんな具合に暮してゐるかと視に來てみると、その生活は幸福なものではなくて、却つて爭ひ合つてゐることが判つた。銘々に氣を惱ましては、生を樂しむことからは遙かに離れた有樣にゐて、いろんな物を持ち出しながら彼等は生を呪つてゐた。

そこで神は獨言なされた。『これは、彼等が離れ〴〵に、各自が生活してゐるから起つたのである。』そこで現狀を變へるために、神は、人間を勞働しないでは生て行けない樣にした。人間は寒さと飢とを防ぐためには家を建てたり、地を掘つたり、果物や、穀物を植ゑたり收穫れたりしなければならなくなつた。

『勞働が彼等を團結させるであらう。』と神は考へた。『彼等は器具を作つたり、材木を調へて運んだり、家を建てたり、種蒔きや、收穫や、紡ぐ事や、織る事や、着物を縫ふ事を一人々々でする事は

出來ない。』

『それは人間に、彼等が心から團結して働けば働く程、豐かになつて、いゝ生活が出來る事を了解せる樣になるであらう。それが彼等を團結させるであらう。』

時は過ぎた。神はふたたび、人間共がどんな具合に暮してゐるか、今は幸福であらうか、それともどうかと來てみられた。

だが、神は、その生活が前よりもなほ惡いものであるのを見た。彼等は働いてはゐた（彼等は仕事を助け合ふことが出來なかつた。）が、事を共にしてゐなかつた。幾つもの小さな組に分れて、それらの組は個々に、仕事を奪ひ合つてゐた。互に邪魔し合つてゐた。そして爭鬪に時を費やし、精力を無駄にしてゐた。それで、それに從つて、彼等の物事はうまく行つてゐなかつた。

見れば、またこんな善くない有樣なので、神は決心された。人間は死んでゆく時を知り得べきではないけれど、何時いかなる時でも命が亡くなるといふやうに、物を並べてやらうと。

『彼等の誰もが、何時いかなる時でも死なゝければならないといふことを知つたら。』と神は考へられた。『極く短かい間、穀物の奪りつこで、銘々に割り當てられた命の間を臺無しにしてしまふのを止めるだらう。』

けれども、それは別なものに外れていつた。人間共が、どんな具合に暮してゐるかを見ようと思つ

て神が戻つてきてみると、その生活は以然に劣らず惡かつた。

強い者は銘々に、人は何時何時でも死ぬものであるといふのを楯にとつて、弱い者を虐げてゐた。死といふものをもつて、弱い者を殺したり、おびやかしたりしてゐた。強い者、及びその子孫等は、何一つ仕事をせず、怠けてゐるので起つてくる身の弱さのために惱んでゐた。しかも、一方では弱い者等は力に餘る仕事をしなければならなかつた。そして休息する暇も無いので苦しんでゐた。人々のあらゆる組は、他の組を恐れ、且つ憎んでゐた。かうして、人間の生活は前よりも不幸になつた。

この有樣をよく視た神は、これを改めようと最後の手段を用ふることに決めた。彼は疾病といふ疾病を殘らず人にふりかぶせた。神は、すべての人間が、疾病にかゝるやうになつたなら、と考へられた——體の達者な人間は、病んでる人を哀れんでやる。そして助けてやる、といふことを會得するだらう。また、自分が病氣になれば、他の達者な人達が代つて自分を助けるやうになるといふことを會得するだらう。とさう思ひなされた。

かくて神は去つた。けれども、神が、病氣といふものを降りかけられた人間共が、どんな具合にいまは暮してゐるかと見に來て見ると、その生活は前よりも更に惡くなつてゐた。人々を結び付けてやらうといふ思し召から折角神が與へてやつたそれらの病氣は、却つて前よりもひどく人間共を引き離したのであつた。強くて、他人を働かせてゐる者共は、病氣に罹ると、無理にも自分を扱ふやうに他

人に强ひてゐた。けれども、自分が達者で、他人が病氣に罹つた時は、ちつとも關はなかつた。仕事を强ひられ、看病を强ひられたところの人達は病氣になつても、仕事をするやうに云ひつけられた。自分で、自分の病氣を養ふ暇もなく、そして、自分を看護してくれる人達もなしに放つて置かれた。病氣に惱める人の溜息は、富める者の樂みを搔き亂すものともならなかつた。家毎に哀れな人々は病み苦しんで死んでいつた。受けようと思へば、受けえられる筈の、富める者からの同情も受けることなく、憐れみもなく、しかも彼等は厭はしい思ひで病人を扱ふところの雇れ人の腕にもたれて死んでいつた。人達は、いろんな病氣に感染するのを氣遣つて、病人に觸ることを怖れて常にその人達から遠ざかつた。それば かりでなく、病人を扱ふ人達からも遠ざかつた。

そこで、神は獨言なされた。『この最後の手段さへ、人達をして、その手段の中に幸福が宿つてゐるといふことを會得させるに至らない、とすれば、止むを得ない、苦しませて、悟るやうにさせるだけだ。』かうして、神は人間から去つてゆかれた。

さて、神が去つてゆかれてから時は經つた。人達は、自分等は幸福でなければならない。そして、幸福になり得るものである、といふことを悟り出して來た。つい、近頃になつて、僅かな人達が、勞働といふものは、或る人にとつては怖ろしいもの、又或る人にとつては、厭はしいものであるべきでない、それは、萬人に共通な、しかも樂しい仕事である。それは、どんな人々でも一つものに結び付

けるものであるといふことを悟つて來た。その人達は、人間の誰でもが、死といふものを考へて、しよつちゆう脅やかされてゐることを悟つた。そして、あらゆる人間の唯一の正しい仕事は、自分に割り當てられた其の年月を、その時を、又その瞬間を、共同と愛との裡に送ることであるといふことを悟つて來た。彼等は、およそ疾病なるものは、人間を離れ〳〵なものとはせずに、寧ろ、その反對に、互に力を協せて相愛し合ふといふ其の機會を與ふるものであるといふことをも悟つて來た。

三つの疑問

或る時のこと、一人の或る王樣にこんな考が浮んであつた——若しも自分が常平生どんなことでも、それを行り出すに當つて相應はしいと云ふ時を知つてゐたなら、又若しも自分が、もつて耳を傾けるに足る正しい人々、その人々に依つて免れうるものは免れるといふ其の人々を知つてゐたなら、わけても、自分がどんな時でも、爲すべき最も大切なものは何であるかを知つてゐたなら、爲る何事にも決して失敗は無いだらう。

といふ考が王樣の心に思ひ浮んだので、王樣は、國ぢゆうに向つて觸を出された。何事でも、それを爲すに當つて相應はしいと云ふ其の時を自分に告げ知らせて呉れる者ならば、また、最も重要な役立つ人は誰であるか、更に、爲すべき最も大切なことは何であるかを知るには如何したらよいのか、といふこれ等のことを自分にまで敎へてくれる者あらば、誰でもよい。その者に多分の褒美を取らす

であらうといふのであつた。

第一の問に答へて、或る者共は言つた、どんなことでも、それをしてよいと云ふ時を知るには、その人は前以つて、日々の、月々の、更に年々の目錄を作らねばなりません。そして、それに賴つて、きちんと生活を續けねばなりません。斯うしさへすれば、と彼等は言つた。どんなことでも、それが爲れてよいと云ふ其の時に爲れるでせう。だが、或る他の者は、すべて事をなす場合、それを爲してよいといふ其の時が、前以つて決められるなどといふことは、とても出來るものでないと云ひ立てた。そんなことは出來るものではない、で、人は自分に忘けて遊び耽つてはゐずに、起りかけてゐるところのものに常に注意を向けてゐて、その上で最も大切なことを爲すべきであると述べ立てた。又、ある者は、王たる者は、起りかけてゐる物事に常に注意すべきであるが、然し、人間はあらゆる行爲に對する正しい時を、誤なく決めるなどといふことは、とても出來るものでない、だから、そのことは賢者に諮つて行るべきである。その賢者は、どんなことでも、それを爲してよいといふ其の時は、うまくあてはめて王の助けとなるだらう。と云つた。

けれども、又他の者は言つた——會議にかけるを待たずして、それを行るか、行らないかを直ぐさま取り決めねばならないものがある。然し、それを決定するためには、人は前以つて如何なことが起りつゝあるかといふことを知らねばならない、それを知り得る人は魔術師だけである。だから、何事もそれを爲るに都合のよい時を知らうためには、人は魔術師と相談しなければならぬ。

これと等しく、とり〴〵な答は第二の問にもなされてあつた。或る者は言つた——王の最も必要な人は大臣であります、と。他の者は言つた——僧侶であります。又他の者は言つた——博士であります。と、また一方の或る者は、必要なその人こそは勇士であります。と。

最も肝要な、爲すべきことは何であるかと云ふ其の第三の問に對して、或る者は、それこそは正しく學問であります、と答へた。他の者は、それは戰術の巧妙さであります、と。又ある者は宗教的信仰心であります、と答へた。

答といふ答はすべて異つてゐたので、王はそれ等の何れを採つてよいのやら判らなかつた。それで、誰にも褒美を與らなかつた。けれども、自分の疑問に對する相應はしい返答を欲しがつたので、王樣は、その王國中に廣く名を知られてゐる一人の隱者に諮つてみようと決心された。

その隱者は、と或る森の奥に住んでゐて、一歩たりとも其處から外に出なかつた。またその隱者は、ありふれた世間の人以外には誰とも會はうとしなかつた。そこで、王樣は粗末な着物を身に着けて、隱者の住居に迎り着かぬうち、馬から下りると、警護の家臣を後に殘してただ一人進んでいつた。

王樣が進んでゆくと、隱者は小屋の前の地を堀つてゐた。王樣を見ると、點頭いたが、そのまゝ掘りつづけた。隱者の樣子は弱々しく、危ぶなつかしく見えた。手に持つてゐる鋤を絕えず地のなかに

突き刺しては掘つた。僅かづゝの土塊が掘り返された。隱者の息づかひは苦しげに見えた。

王樣は隱者に近づいて言つた。『隱者さん、訪ねて參りました。三つのお尋ね事がございますので、それを敎へていただきたうございます。どうしましたら、正しい事を正しい時にやれることが解りませうか、又、私にとつて最も大切な人々は誰なのでございませうか？その人々には、他の誰よりも多く心を向けて諭らなければなりません。それから又最も大切なこと、それには何にも勝して心しなければならないのですが、その大切なことは如何なことでございませうか？』

隱者は王樣の言葉に耳を傾けてゐた。けれども何とも答へなかつた。彼は手を動かして、ふたゝび地を掘りつづけた。

王樣は言つた。『貴方は疲れておゐでです。その鋤をお貸し下さい。私が代つてやりませう。』

『有難う。』と隱者は言つた。鋤を王樣に渡すと、地面に腰をおろして休んだ。

ふたところ掘ると、王樣は手を休めて、また先きの問を繰り返した。けれども、隱者はやはり答へなかつた。そして、立ち上ると手を延ばして鋤を求めて言つた。

『さあ、少しお休み、仕事は俺がつづけませう。』

けれども王樣は鋤を渡さず掘りつづけた。一時間は過ぎた。二時間は過ぎた。日は木の間の影に沈み始めた。王樣は、終ひの鋤を地に突き入れたまゝ言つた。

『隱者さん、私は訪ねて參りました、お尋ねしたく思ひまして。貴方が何も敎へて下さいませんなら、さう仰有つて下さい。そしたら歸つてまゐります。』

隱者は言つた。『誰やら、此方に駈けてくるやうだ。誰だか見ませう。』

王樣はあたりを見廻してみた。すると、一人の髯もぢやな男が、森のなかから駈け出して來るのが見えた。男は兩手をしつかりと腹の上に押し付けてゐた。血潮がその手の下から流れて見えた。男は王樣の前までくると、弱々しげに地べたに倒れて哀れに呻いた。王樣と隱者とは、男の衣服を脫がせてやつた。と、腹のところに大きな傷があつた。王樣は大層丁寧に、その傷を洗つてやると、自分のハンケチと隱者のタオルとで、その傷口を繃帶した。けれども、血は流れて止まなかつた。で、王樣は、何べんとなく、その生溫かな血潮に透んだ繃帶を解き代へては傷口を洗つてやつた。そしては繃帶を捲き直してやつた。つひに流れ出す血が止まると、男は正氣付いて何か飲むものを欲しがつた。王樣は隱者の手を藉りて、傷付いてゐる男を小屋のなかに運び入れると、床に臥かした。床に横はりながら、男は二つの眼を閉ぢたまゝじつとしてゐた。さて、王樣はその森まで歩いて來たためと、自分がやつた勞働とで、ひどく疲れが出て、閾の上にしやがんだまゝ眠りに落ちていつた。ぐつすり寢込んで、夏の短衣をよもすがら眠りつづけた。朝になつて、王樣が目覺めた時には、自分が何處にゐ

るのやら、また見たこともない髯男はいつたい誰なのやら、ちよつとの間思ひ出せなかつた。その髯男は、床の上から、目をきよろつかせて、じつと王様をみつめてゐた。

『御免し下され！』と、髯もぢやの男は、王様が目を覺まして彼の方を見た時に、弱々しい聲で言つた。

『俺はお前さんが誰であるやら分りませんが……そんなことを言はれるやうな覺えもないが。』と王様は答へた。

『あなた様は私を御存じないでせう、だが私はあなた様を存じてをります。私はあなた様の敵です、あなた様に仕返ししようと誓つて來ました。といふそれは、あなた様は私の兄弟を死刑にした上、その財産を取りあげたからでした。私は、あなた様が隱者さんに遇はうと獨やつて來たのを知りました。それで、私はあなた様の歸りを途中で待ち受けて殺してやらうと決心しました。けれども、日が沈んでしまつても、あなた様は戻りませんでした。で、私は待伏せてゐる處から脫け出して來て、あなた様を探し出さうと思ひました。そして、あなた様の警護の者のゐる場所に來て取つ捕まつて傷を受けました。私は彼等の手から脫れましたが、しかし、もしもあなた様がこの傷の手當をして下さいませんでしたら、死んでしまふのでした。私はあなた様を殺さうと思つたのに、あなた様は、この私をお救ひ下さいました。で、私が助かりましたらば、そしてあなた様が、よろしいと仰有つて下さいます

なら、あなた様の最も忠實な家臣となつて、あなた様に仕へませう。すれば、私の息子たちも私の通りにするでせう。お免し下さいますやうに。』

王様は、自分の敵が、かほどまで和かな心に返つたのを喜んで、自分の仲間としてやることを容した。容すと一緒に、男を看護するために自分の下僕と侍醫とを寄越さう、それから、財産も返してやらうと約束した。

傷付いた男を殘して、王様は入口を出て隱者を探した。出てゆく前に、も一度自分の問に答へてもらはうと望んでゐた。隱者は戸外に出て、膝をかがめて、昨日掘りならした場所に種子を播いてゐた。

王様は近づいて云つた。

『お暇に際して、どうぞ私の問に答へて下さい。隱者さん。』

『あなたは、もう夙に答へられてゐるのぢや。』と隱者は、その痩せこけた足を屈めたまゝ、そして王を見つめたまゝ言つた。王様はそこに立つてゐた。

『答へられた？どうしてでせう？仰有る意味は判りません。』と王様は言つた。

『あなたはそれに氣付かないのぢや。』と隱者はそれに答へた。『あなたが、若しも昨日、この俺の弱々しいのを憐れんでくれなかつたら、この俺のために種を播く床を掘り平らしてくれず、あのまゝ戻つて行つたなら、あの男は襲ひかゝつたのぢや。そうしたら、あなたは私と一緒にこゝに停まればよ

かつたが、と悔むことであつたらう。してみると、あなたが、この種床を掘つてあつたその時こそは、最も大切な時であつたのだ。して、あなたの最も大切な事といふのは、私のために親切をしてくれたそのことであつたのぢや。それから、あの男が俺たちの前に駈けて來た時、あなたは、あれを介抱してやつた。最も大切な時がそれであつた。何故といつて、もしもあなたが、あの男の傷を包んでやらなかつたら、彼はあのまゝ死んでしまつて、あなたと和解することがなかつたのぢや。で、最も大切な人間こそはあの男ぢや。さて、あなたがあの男のために盡してやつたところのものが、あなたの最も大切なことであつたのぢや。だから思つてみるがいゝ、大切であるところのただ一つのことがある——いまぢや！俺等が何か一つの力を持つ時、その時だけが、本當に大切な時なのぢや、最も大切な人は、あなたと共にある人なのぢや、何故と云ふに、如何な人でも、自分が常に誰と係り合ふやうになるか知ることが出來ないから、又、最も大切なことゝ云ふのは、人のために親切を盡してやること、それぢや。何故となら、人間といふものは、この目的のためにのみ、この世に生を享けたからぢや。』

（完）

大正十一年九月五日印刷
大正十一年九月廿一日發行
定價金六拾錢

國民傳說

譯者　神田豐穗
發行者　神田豐穗　東京市神田區表神保町十番地
印刷者　小島爲吉　東京牛込早稲田鶴巻町三六二
印刷所　早稲田印刷株式會社　東京牛込早稲田鶴巻町三六二

發行所　東京市神田區表神保町十番地
春秋社
振替東京二四八六一番
電話神田二一三八番

1048

文學博士 金子筑水 監・執筆

小田内通敏、小野實、伊達保美、村松正俊、柳田泉、木村毅、宮原知久、宮島新三郎、平林初之輔

新學藝講座

定價一册金壹圓
送料一册金六錢
半ヶ年分金五圓七拾錢
一ヶ年分金拾圓八拾錢
外に郵税を要す

全十二册 書目

春期講座	夏期講座	秋期講座	冬期講座
科學概論	海洋の研究	近代思想家の宗教觀	人文地理學
ルッソウよりトルストイまで 希臘文藝史	最近社會思潮	最近美學	神祕主義
	新文學論	最近生物學	最近文藝・思潮

▽健全なる國家は健全なる知識階級によりて形式さる。而して健全なる知識階級は一日と雖も健全なる知識の吸收を忘る可からず。これ該階級の義務也。責任也。

▽本講座は、哲學、文藝、科學、宗教等の最新知識を、大學の講堂より一般世間へ專門家の手より凡ゆる知識階級へ、解放せんとして企劃せられたるもの也。

▽詳細なる內容見本申込次第進呈

◎發行大正十一月四月より十二月までに全部完了す

終